藤田医科大学 保健衛生学部

社会実装看護創成研究センター 2025 年報

Research center for implementation nursing science initiative
Annual report 2025. January 1 – December 31

FUJITA HEALTH UNIVERSITY

目　　次

１．メンバー 1

２．センターの概要 1

３．研究活動実績 5

３－１．藤田医科大学アクションプランに基づく研究活動

１） 携帯型エコー使用した排便アセスメントによりケアが選択できる看護師の育成と上記看護師を含めたチーム医療体制の構築（PI: 小柳 礼恵）

２） 看護理工学的アプローチによる次世代型アドバンストスキンケアモデルの確立（PI: 光田 益士 ）

３） 第 6 のフィジカルアセスメントツールとしてのエコー可視化技術の開発・普及：末梢静脈カテーテル留置技術（PI: 村山 陵子）

４） エコーを用いた嚥下視える化データベースに基づく肺炎予防効果の実装研究（PI: 三浦 由佳）

５） リンパ浮腫管理成功に向けたエコーを用いたアドバンストリンパ浮腫ケアモデルの確立と実装 （PI: 臺　美佐子）

４．教育活動実績 12

４－１．学部教育 12

４－２．大学院教育 13

４－３．社会実装看護創成研究センター　ゼミナール 15

５．社会的活動実績 18

５－１．主な学会での活動 18

５－２．主たる活動実績 20

６．外部資金獲得 26

７．研究業績 27

資料　社会実装看護創成研究センター設立 5 周年記念シンポジウム 報告書 34

１．メンバー

センター長	教授	須釜 淳子
専任教員	教授	村山 陵子
	准教授	小柳 礼恵
	准教授	三浦 由佳
	講師	光田 益士
客員教員	教授	臺 美佐子
	准教授	城月 雅大（4 月 1 日～）
	講師	川村 亨平
	講師	渡邉 直美
特別研究員		相原 晶子
		佐野 友香（4 月 1 日～）
		杉山 彩奈（4 月 1 日～6 月 30 日）
		大西 麻衣（4 月 1 日～）
研究補助員		荒堀 裕子
アドバイザー	真田 弘美 教授（石川県立看護大学　学長）	

大学院生（下線：2024 年度修了生）（二重下線：2025 年度入学生）

博士課程修了　佐野 友香、杉山（間脇） 彩奈

博士課程 3 年　富田 元、石亀 敬子、河裾 永恵、山本 駿、[影浦 直子]

博士課程 2 年　田村 茂、前田 初美、小笠原 ゆかり、松田 奈々、[桂川 清多]

博士課程 1 年　北野 ゆりか、齋藤 裕也、
相原 晶子、遠藤 真穂、沼田 悠希

修士課程修了　池田 真弓、河﨑 明子、野村 梨帆、齋藤 裕也

修士課程 2 年　[酒井 沙藍]、[田中 悠偉人]、[内藤 千尋]

修士課程 1 年　河西 将志、小林 南菜子、[又吉 真由美]、[伊藤 千佳]

※[ ]を付した大学院生の責任教員はセンター教員ではないが年度途中から代行し指導した学生である

２．センターの概要

2021 年 4 月 1 日より藤田医科大学保健衛生学部に「社会実装看護創成研究センター」が新設された。2022 年 4 月より大学組織再編に伴い、研究推進本部イノベーション推進部門（齋藤邦明・部門長）に配置換えとなった。その後、センターに所属する教員は、2023 年 4 月から保健衛生学部看護学科の所属となり、センター兼務となった。なお、「社会実装看護創成研究センター」自体は、2025 年 1 月 1 日付で研究推進本部から保健衛生学部へ移動となった。

臨床現場の技術革新が進む中、看護領域においてもロボットや Information and

Communication Technology（ICT）、Artificial Intelligence（AI）などのテクノロジーの有効活用が求められている。一方で、医工連携と異なり、看工連携の社会実装に関する理論および方法論は、未だ確立されていないのが現状である。本センターでは、大学病院や地域包括ケア中核センターと協力し、看護実践の場でこれらの研究を推進するとともに、次世代を担う人材の育成にも取り組む。

体制は、臨床のニーズや課題の抽出、データベース化および実装研究を行う共創型研究部門と、同部門が抽出した課題に対し看護理工学からアプローチする課題焦点型研究部門の 2 部門である。（図 2-1）生体・生活情報を導出するシステム構築やデバイス開発を通じて、健康増進や保健・医療、さらには地域包括ケアやまちづくりに寄与することをめざす。

センターのミーティング室、実験室は 9 号館 5 階に設置されている。

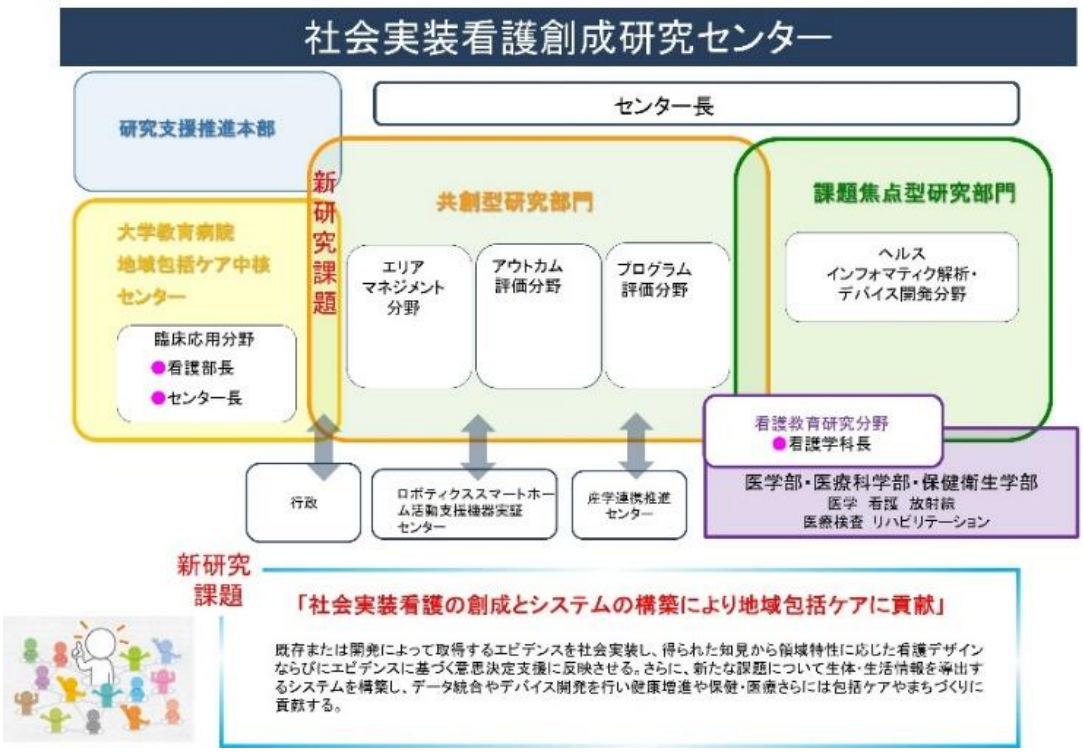


図 2-1. 社会実装看護創成研究センター体制図

2023年4月以降は、5名の教員でセンターの活動を推進した。毎週火曜日午後に研究ミーティングを開催し、センター専任教員が主導する研究の進捗、論文抄読、学術雑誌の最新情報の共有、実装科学の基礎学習を行った。

2024年4月から客員教員ならびに特別研究員を委嘱し共同研究を開始した。2024年は、「地域に暮らす脊髄損傷者のエコーによるフィジカルアセスメントを基盤とした排便管理の実装」・川村享平氏（特定非営利活動法人リハビリテーションビレッジ・代表）、「喉頭摘出後の患者の食道発声のメカニズムの解明」・渡邉直美氏（日本赤十字豊田看護大学・講師）、「特定行為研修修了者の看護の質評価」・相原晶子氏（保健衛生学部・臨床看護研修

センター・センター長）であった。2025年には、「記憶の食卓がもたらす痛みの緩和とQOL向上」・城月雄大氏（名古屋外国語大学・准教授）、「看護系大学研究門と病院看護部とのユニフィケーション」・大西麻衣氏（藤田医科大学病院・医療の質・安全対策部・副主任）、「AIを活用した、患者の安全、スタッフの安心、チームの機能を支える勤務体制の構築」・佐野友香氏（藤田医大学病院看護部・看護長）が新たに加わった。

教育病院との連携を深めるため、引きつづき毎月 1 回、第 1 教育病院看護部（髙井亜希看護部長、他）にて、眞野惠好統括看護部長、第 2～4 病院看護部（三鬼達人看護部長、松嶋文子看護部長、小島菜保子看護部長、小野布佐子看護部長、他）ともオンラインで接続し、臨床研究に関する打ち合わせを行った。（写真 2-1，2-2）

写真 2-1. 看護部との定例ミーティグ（2025.4 撮影）

写真 2-2. 看護部との定例ミーティグ（2026.1撮影）

2023 年 4 月から大学院教育のプラットフォームとしての役割を果たし、2025 年も継続した。看護学科竹原君江教授、中村小百合教授のゼミと合同で毎週月曜日に大学院生（修士 7 名、博士 15 名）の学位論文の進捗報告、論文抄読、学会予演を行った。（写真 2-3, 2-4）

写真 2-3. 大学院ゼミ参加者（2026.2 撮影）

写真 2-4. 対面型大学院ゼミ（2026.2 撮影）

2025 年 9 月 6 日藤田医科大学保健衛生学部 3 号館 101 教室で社会実装看護創成研究センター設立 5 周年記念シンポジウムを開催した。シンポジウムのテーマを、「社会実装を志向した看護学研究の展開：技術革新・人材育成・臨床連携の 5 年間の実績と展望」とした。大学からは、長谷川みどり保健衛生学部長、世古留美看護学科長，看護学科教員の参加をいただいた。病院看護部からは、眞野惠子統括看護部長、藤田医科大学病院・高井亜希看護部長、七栗記念病院・松嶋文子看護部長をはじめ多数の看護師の方々の参加をいただいた。センター教員、大学院生を含め総勢 113 名が参加した。シンポジウム終了後、報告書を作成した（巻末資料参照）。

2025 年 3 月にセンターをプラットフォームとして行ってきた大学院ゼミから博士学位取得者 2 名を輩出した。これを機に、2025 年 9 月に同門会「紫藤会」を発足させた。

３．研究活動実績

３－１．　藤田医科大学アクションプランに基づく研究活動

【目指す姿】
世界一独創的な研究拠点へ：未来社会の期待に応える次世代研究の推進
世界に誇れる「藤田の看護」を創成する

【中期目標】
看護理工学を基盤とした看護技術開発の推進、および開発した技術の社会実装の手法を確立しエビデンス・プラクティスギャップを埋める

１）　携帯型エコー使用した排便アセスメントによりケアが選択できる看護師の育成と上記看護師を含めたチーム医療体制の構築（principal investigator (PI): 小柳 礼恵）

排泄に関するケアの向上には「排尿自立支援加算」「IAD のベストプラクティス」により対策が取られている。高齢者の便秘は有病率が高く死亡リスクも高いとされている。中でも、認知症高齢者は排泄に関する自覚症状を適切に訴えることができず医療者による統一したアセスメントが急務とされている。近年は便秘対策に関するガイドラインも作成され普及されつつある。

当センターでは、携帯型エコーを用いたベットサイドにおける便秘の可視化評価の有効性の評価とケアの質向上を目指し研究を実施している。国立長寿医療研究センター排便サポートチームと共同し認知症患者の便秘評価に携帯型エコーを用いた効果検証を実施し学会発表・論文投稿し、更に学会セミナー講師等を通してエビデンスを普及している。日本創傷・オストミー・失禁管理学会の取り組みとし、排便管理に関する学会「学術教育委員会：排便担当」、次世代看護教育研究所におけるエコー排泄ケアコースにおいて講師の役割を担い、質の高いケアの普及に貢献している。今後も、超高齢社会に備え、当センターは病院、在宅が包括的にチーム医療として便秘対策が可能となるよう、エビデンス構築と実装研究を進め排泄ケアの質の向上、医療経済への貢献を目標とする。（図 3-1-1）

2025 年の実施事項は以下となる。

（１）関連学会と連携しエビデンスに基づく排便ケアの啓発

・一般社団法人　日本創傷・オストミー・失禁管理学会

学術教育委員会：排便担当　須釜 淳子、小柳 礼恵 の活動により、排便ケアの質の向上、エビデンスに基づいた排便ケアの普及を推進している。

（２）高齢者を対象とした排便ケアに関するチーム医療の普及

・国立研究開発法人長寿医療研究センター　排便サポートチームとの協働

超高齢化社会が進む中、認知機能が低下した高齢者のニーズと医療者のアセスメントにより患者へ適切な排便ケアの提供が課題となっている。その課題を解決するために上記施設と協働して排便ケアの質の向上と推進を実施している。

・排便サポートチーム：国立研究開発法人長寿医療研究センター
病院：松浦 俊博、山田 理、竹内 さやか、
客員研究員：小柳 礼恵
・研究実績は、学会発表５件、論文１編である。

（３）排便ケアに関わる看護師への教育活動

日本創傷・オストミー・失禁管理学会　学術教育委員会：排便担当の活動の一環である「第3回排便管理講習会（エコー講習会含む）」では、講師として講習会に協力している。
排便管理講習会（日本創傷・オストミー・失禁管理学会）：講師　小柳礼恵
次世代看護教育研究所：排泄ケアコース：講師 須釜淳子、小柳 礼恵

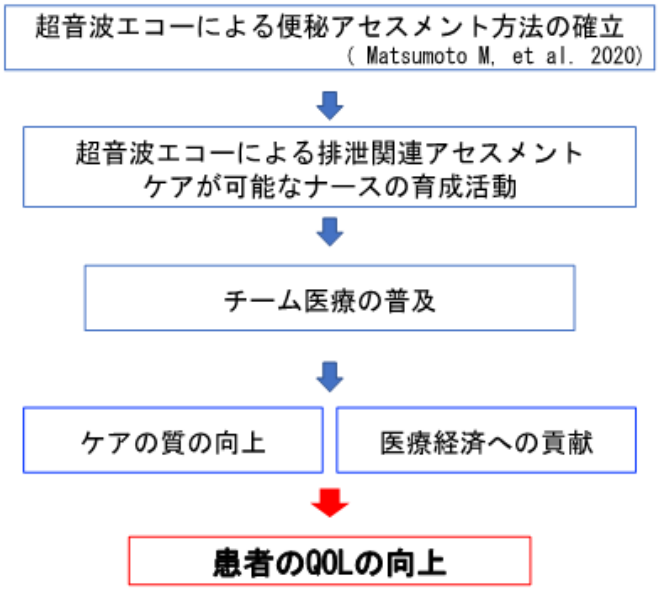


図 3-1-1. 携帯型エコーによる
ベッドサイドでのアセスメント

２）　看護理工学的アプローチによる次世代型アドバンストスキンケアモデルの確立（PI: 光田 益士 ）

看護学と理工学の融合による新たな看護価値創造への取り組み

看護学と理工学の融合型研究を通じて、看護技術の定量化・可視化・効率化を推進するとともに、未来を見据えた「新たな看護の価値創造」に貢献することを目的として研究活動を展開した。2025 年度も、藤田医科大学病院看護部、藤田医科大学七栗記念病院看護部、藤田医科大学岡崎医療センター看護部との共同研究を継続・発展させ、さらに産学連携を通じた複数企業との共同研究も推進した。以下に、本年度の主要研究成果として 2 つの基幹研究について報告する。

褥瘡予防と治療に関する基礎研究、臨床応用および実装科学研究

力学的リスク要因の可視化とドレッシング材研究の進展

褥瘡発生および治癒遅延に関与するずれ力・摩擦力・圧力の同時計測を可能にする評価モデルの精度向上を図った。本モデルを活用し、複数の予防的ドレッシング材および新開発品の力学的低減効果を検証しその有効性を新たに示すことができた。

在宅領域における褥瘡予防プログラムの実装に向けた研究

地域・在宅療養者の褥瘡予防を目的に開発してきた床ずれ危険度チェック表、床ずれ予防プログラムについて、本年度は「実装科学」の観点から、在宅ケア提供者（訪問看護師、介護職等）を対象としたプログラム活用の準備を開始した。

失禁関連皮膚炎（IAD）の生物学的リスクファクターに関する研究

皮膚常在菌と IAD 発症リスクに関する新たな知見

脳卒中患者を対象に、失禁関連皮膚炎（IAD）と陰部皮膚表面に存在するウレアーゼ産生菌との関連性をこれまでに明らかにしてきた。研究対象者を入院患者から地域在住者へ拡張し、陰部に皮膚かぶれを有する地域在住者は、非保有者と比較して有意に高い頻度でウレアーゼ産生菌を保有することを立証した。IAD 保有者と非保有者の菌叢構造の違いに関する生物学的背景を整理した。

３）　第 6 のフィジカルアセスメントツールとしてのエコー可視化技術の開発・普及：末梢静脈カテーテル留置技術（PI: 村山 陵子）

（１）エコーを用いる末梢静脈カテーテル留置技術の実装研究（藤田医科大学病院）

2022 年度から、末梢静脈カテーテル留置の際にエコーを活用する看護技術の実装研究を、藤田医科大学病院の外来、がん薬物療法センターにて継続して実施した。昨年まで、実装プロセスを進め、看護技術におけるエコーの活用が日常の業務に定着したことを論文化し投稿中である。また取り組んだ看護師の方々による実践報告の論文も作成中である。（写真 3-3-1）（2024 年 12 月現在）

写真 3-3-1. 研究実施当時の外来薬物療法センターの方々
（神納美保. 第 55 回日本看護学会. ランチョンセミナースライドより）

（２）エコーを用いる可視化技術の教育体制のモデルの確立

①看護基礎教育におけるエコー活用方法の習得

看護理工学会の学術委員会の研究プロジェクトとして 2023 年より取り組んでいる。今年は次のように活動を展開した。

- プロジェクト名：看護学生のためのエコーを用いるフィジカルアセスメント技術導入促進プロジェクト
- プロジェクトメンバー：

竹原君江	藤田医科大学保健衛生学部看護学科
村山陵子	藤田医科大学保健衛生学部看護学科
樋之津淳子	札幌市立大学看護学部
阿部麻里	東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻
四谷淳子	福井大学学術研究院医学系部門看護学系領域
松井優子	石川県立看護大学
高木良重	福岡大学医学部看護学科
巻野 雄介	日本赤十字豊田看護大学
鈴木美穂	慶應義塾大学看護医療学部
村井孝子	純真学園大学保健医療学部看護学科
澤野弘明	愛知工業大学

- 目的：看護基礎教育で「エコーを聴診器のように使用しよう」と考えられる学生を育てる
- 活動内容：学内演習にエコーを導入した効果検証の研究計画を立案し、今年に入り、多機関共同研究として倫理審査の承認がおりた。プレテストとして慶応義塾大学、福井大学、藤田医科大学で実施した結果を、第 13 回看護理工学会学術集会にて発表した（写真 3-3-2）。2026 年に実施した結果に基づき効果を検証する。

さらに今後、看護系研究者、工学系研究者と共同で教育体制のモデル構築を目指す。

写真 3-3-2. 第 13 回看護理工学会. 学術委員会 WG ワークショップにて

②看護師の卒後教育（院内教育）におけるエコー活用方法の習得

臨床看護研修センターで行っている特定行為研修では、特別科目として「看護師のエコー実践」が位置づけられ、演習 1 単位×2 回の講師を担当した。

（３）エコーを用いたカテーテル留置技術をサポートする周辺機器開発

医療機器開発企業との共同研究により、PI の前任の大学在任中、より血管径の大きい静脈がある上腕に留置できるカテーテル（テルモ株式会社）を開発した。そのカテーテルが日本初の留置針型ミッドラインカテーテル「サーフローMidela」として 9 月に上市された（図 3-3-3）。留置針型であるため、C2 区分（新機能・新技術）での保険適用が認められたものである。　今後は安全、安心、そして確実なカテーテル選択と留置技術を普及していくことが、実装センターの研究者として求められており、導入のためのプログラムの開発に取り組んでいる。

また、2023 年上市に至っていたエコー透過性に優れたドレッシングフィルム「カテリープラス™エコー」の開発経緯が看護理工学会誌に実践報告として掲載され、その論文が 2025 年度 実践報告・速報優秀論文賞を受賞し、表彰された（写真 3-3-4）。

（村山陵子，阿部麻里．超音波検査装置を用いる末梢静脈カテーテル留置・固定のための新ドレッシングフィルムの開発．看護理工学会誌，2024; 11:106-111.）

図 3-3-3.「サーフローMidela」
https://www.terumo.co.jp/newsrelease/detail/20250925/10931

写真 3-3-4．第 13 回看護理工学会. 授賞式

４）　エコーを用いた嚥下視える化データベースに基づく肺炎予防効果の実装研究（PI: 三浦 由佳）

AI を用いて咽頭残留物などが自動で着色されたエコー画像を含むデータベースから、誤嚥性肺炎の予防のためのケア介入アルゴリズムを提案する仕組みを作り、アルゴリズムの実装評価を行うことが研究の最終目的である。これまでに、AI を用いたエコーによる咽頭残留物の定性・定量的評価方法の開発を目指し、リハビリテーション学科と共同し 3D-CT 画像とエコーの同時撮影方法を作成した。また、学内の工学系研究者と共同し、嚥下エコー学習用ファントム作成のための気管や咽喉頭の鋳型を光造形 3D プリンターを用いて作成

した。ファントムは今後、誤嚥物・咽頭残留物の観察教育プログラムに導入予定である。2025年度は、これまでにエコー技術の訓練を受けた訪問看護師が在宅でエコーを用いた嚥下のアセスメントを実施し、サーバーに上げたエコー画像の分析を実施した。分析結果をもとに今後、咽頭残留の有無と推奨される摂食嚥下ケアの選択方法を提示する仕組みを作成予定である。

図 3-4-1. 画像収集からケア介入アルゴリズム作成までの流れ

５） リンパ浮腫管理成功に向けたエコーを用いたアドバンストリンパ浮腫ケアモデルの確立と実装 （PI: 臺 美佐子）

（１）リンパ浮腫ケア選定のためのエコーアルゴリズム作成と遠隔ケア・教育への展開

リンパ浮腫管理におけるエコー評価は、診断・重症度評価・ケア選択といった各目的に応じて国内外で検討が進められている。これまで、リンパ浮腫患肢の特徴的なエコー所見が明らかにされてきたものの、どのような真皮・皮下組織の内部性状に基づきケアを選択すべきかについては十分に明確ではなかった。そこで本年度は、これまでに構築したリンパ浮腫ケア選定をアシストするエコーアルゴリズムを基盤として、臨床応用および実装段階への発展を目的とした研究を展開した。

具体的には、リンパ浮腫遠隔ケアシステムと併用したエコーアセスメントの実施を進め、対面でのケアに加えた新たなケア提供モデルとしての可能性を検討した。また、臨床症例の

継続的な追跡を通じて、アルゴリズムに基づくケア選択の妥当性および実践的有用性の検証を行い、実臨床における適用性に関する知見を蓄積した。

加えて、医療従事者教育への展開として、浮腫ファントムを用いた実践的教育教材を作成し、エコー所見の理解および評価技術の習得を促進する教育方法として活用可能であることを示した。これにより、エコーアセスメントの標準化および教育の質向上に寄与する基盤が整備された（写真 3-5-1,3-5-2）。

現在は、遠隔ケア環境におけるエコー評価の運用体制および技術的条件のさらなる整備を進めており、リンパ浮腫管理における新たなケアモデルの提案につながることが期待される。本研究成果が実装されることにより、リンパ浮腫ケアの適切な選定が可能となり、浮腫増悪の予防ならびに蜂窩織炎再発率の低減に寄与することが期待される。

なお、リンパ浮腫エコーアセスメントに関する成果に関し、国際学会（12th International Lymphoedema Framework Conference）や、国内学会（第 40 回日本がん看護学会学術集会、第 9 回日本リンパ浮腫治療学会学術総会）等で発表した（写真 3-5-3）。

写真 3-5-1. リンパ浮腫のエコーアセスメント

写真 3-5-2. 第40回日本がん看護学会交流集会にて

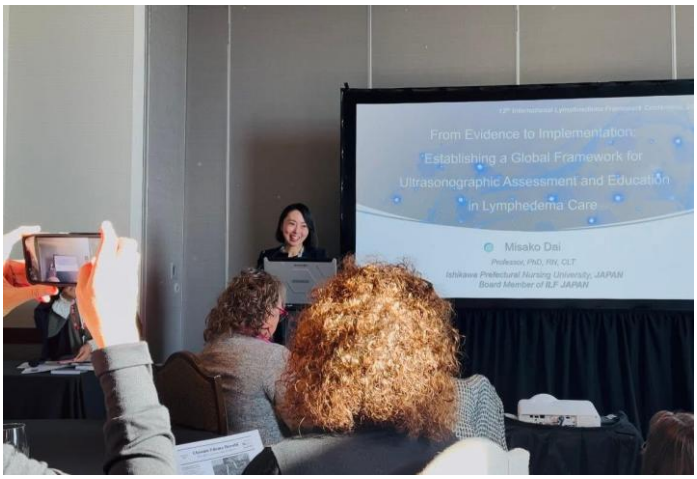


写真 3-5-3. 12th International Lymphoedema Framework Conference にて

４．教育活動実績（2025 年度として掲載）

４－１．学部教育†

科目名	開講時期	担当者†
基礎科目		
基礎ゼミ	1 年前期	村山、小柳、三浦、光田
自然科学	1 年前期	光田
専門科目		
看護学概論	1 年前期	光田
家族と看護	2 年前期	須釜、村山
アセンブリⅡ‡	2 年全期	小柳、三浦、光田
アセンブリⅢ‡	3 年全期	光田
看護管理学	4 年前期	小柳
基本看護技術Ⅱ	1 年後期	村山、光田
看護過程展開論Ⅱ	2 年前期	村山
看護研究方法論	3 年前期	光田
リハビリテーション看護	3 年前期	光田
保健統計学演習	3 年前期	光田
卒業研究	4 年全期	須釜、村山、小柳、三浦、光田
老年看護学概論	1 年後期	須釜
老年看護学方法論	2 年後期	須釜、三浦
老年看護実践方法論	3 年前期	須釜、三浦
老年看護学実習Ⅰ	3 年後期	須釜、三浦
老年看護学実習Ⅱ	4 年前期	須釜、三浦
統合看護学実習	4 年前期	村山、小柳、光田
リハビリテーション学科 一般臨床医学	1 年後期	小柳

†：授業・演習の一部でも担当した場合を記載，‡：専門職連携教育

４－１－１．卒業研究論文

卒業研究は、看護学科 4 年次生 129 名が 11 分野に配置され、うちセンター教員が 19 名を担当した。全員が論文提出に至った。

老年看護学分野（8 名）

安藤 瑞紀　　外来受診時の車から車椅子への最適な移乗方法の検討
～パーキンソン病を有する高齢女性患者の場合～

越智 寛介　　外来受診時の車椅子から車への最適な移乗方法の検討：
パーキンソン病を有する高齢女性患者の場合

河野 心音	車椅子から自動車への移乗動作の改善策の検討： 脳梗塞後遺症患者による右半身麻痺の場合
小林 香月	高齢者外来患者における車から車椅子への移乗動作と改善に関する検討： 脳梗塞後遺症による右半身麻痺患者の場合
梅村 南凪	中枢神経の覚醒が原因の不眠症患者をスクリーニングする方法と、どのリラクゼーション方法が睡眠の質や時間の改善に寄与するかについて
奥田 莉菜	セルフネグレクト状態に陥りやすい状況にある独居高齢者への支援方法の検討
熊谷 莉来	高齢者の意思決定支援における効果的な意思決定支援の方法とその場面についての文献検討
橋本 侑奈	顔面へのマッサージが口腔機能に与える影響

統合看護学分野（11 名）

石川 朋佳	学童期・思春期患者の ACP 支援についての文献検討
大久保 杏怜	ICU で働く看護師と入院する患者のアラーム音に対する認識の違いと看護実践の検討
榊原 えり	認知症高齢者を介護する家族支援についての文献検討
早川 日菜	膠原病を有する患者の困難への就労に関する支援の検討
青木 華子	成人前の子どもを持つ終末期がん患者とその家族への支援
高橋 葵	膠原病を抱える患者の疾患の受容過程における看護
半仁田 菜月	精神疾患を抱える親を持つヤングケアラーの現状と支援についての文献検討
柳澤 凛	小児 1 型糖尿病患児本人や家族の抱える不安に対する介入方法についての文献検討
壁谷 颯人	終末期小児を持つ遺族に対するグリーフケアの現状と課題についての文献検討
川端 咲	学童期の小児がん患者に対する復学支援における医療職者・教育関係者及び保護者・本人の課題と看護師の役割
三橋 果穂	青年期・壮年期がん患者の死別家族に対する看護支援の文献検討

４－２．大学院教育†

科目名	開講時期	担当者†
保健学研究科保健学専攻 修士課程		
共通科目		
看護研究法	前期	須釜、村山、小柳、三浦、光田
看護理論	後期	小柳
保健実践入門	後期	須釜、光田
看護学領域		

基礎・統合看護学特論Ⅰ	前期	村山、小柳、光田
基礎・統合看護学特論Ⅱ	後期	村山、小柳、光田
基礎・統合看護学演習Ⅰ	前期	村山、小柳、光田
基礎・統合看護学演習Ⅱ	後期	村山、小柳、光田
成人・老年看護学特論Ⅱ	後期	須釜、三浦
成人・老年看護学演習Ⅱ	後期	須釜、三浦
基礎・統合看護学特別研究	全期	村山、小柳
成人・老年看護学特別研究	全期	須釜、三浦
保健学研究科保健学専攻 博士後期課程		
共通科目		
保健科学概論	前期	須釜、村山
保健科学研究論	後期	須釜、村山、三浦
専門科目		
保健看護融合科学特論	前期	須釜、村山
保健看護融合科学演習	後期	須釜、村山
保健看護融合科学研究	全期	須釜、村山

†：授業・演習の一部でも担当した場合を記載

４－２－１．博士論文

センター所属教員が指導を担当した博士課程の学生１名が論文を提出した。

山本　駿

Incidence and risk factors for peripheral intravenous catheter failure in Japanese neonatal intensive care unit and growing care unit: a multicenter observational study

日本の NICU・GCU における末梢静脈カテーテル留置による catheter failure の発生率とリスク因子：多施設観察研究

Fujita Medical Journal (DOI: https://doi.org/10.20407/fmj.2025-027)

指導教員：村山 陵子

また、責任教員はセンター教員ではないが、年度途中から代行し指導した学生 1 名が論文を提出した。

影浦　直子

Feasibility of using a pocket-sized ultrasound imaging device for detecting insulin-derived amyloidosis-like findings in patients with diabetes mellitus: a preliminary study

ポケット型超音波装置を用いた糖尿病患者におけるインスリン由来アミロイドーシス様所見の検出可能性：予備的研究

Fujita Medical Journal (DOI: https://doi.org/10.20407/fmj.2025-028)
指導教員：竹原 君江，須釜 淳子

４－２－２．修士論文

責任教員はセンター教員ではないが、年度途中から代行し指導した学生３名が論文を提出した。

酒井　沙藍
開口障害のある患者に対する看護師の口腔ケアの現状と困難の実態調査―横断的記述研究―
A Survey on the Nurses' Actual Difficulties of Oral Care for Patients with Trismus : A Cross-Sectional Descriptive Study
指導教員：竹原 君江，須釜 淳子

田中　悠偉人
Z 世代新人看護師の世代の特徴や価値観に起因したリアリティショック要因に関する研究
Factors of Reality Shock among New Graduate Nurses from Generation Z: Influences of Generational Characteristics and Values
指導教員：竹原 君江，須釜 淳子

内藤　千尋
フットケア外来看護師対象の教育プログラム開発―直接鏡検を用いた足白癬・爪白癬のアセスメント技術習得を目指して―
Development of an Educational Program for Foot Care Outpatient Nurses: Acquiring Tinea Pedis and Tinea Unguium Assessment Skills using Direct Microscopy
指導教員：竹原 君江，村山 陵子

４－３．社会実装看護創成研究センター ゼミナール

2022 年度からゼミナール（通称ゼミ）を開始している。2023 年度のゼミからはセンターに所属する教員が指導責任者となる院生のみならず、基礎看護学、成人看護学分野教員が指導責任者となる院生も含めた。したがって、2025 年度は次の必修単位取得科目を兼ねるものである。

- 基礎・統合看護学演習Ⅰ，Ⅱ（2＋2 単位）
- 成人・老年看護学演習Ⅰ，Ⅱ（2＋2 単位）
- 基礎・統合看護学特別研究（10 単位）
- 成人・老年看護学特別研究（10 単位）

- 保健看護融合科学演習Ⅰ（2 単位）
- 保健看護融合科学研究（6 単位）

１）出席メンバー（2025 年度）

担当教員：須釜 淳子、村山 陵子、竹原 君江、中村 小百合、皆川 敦子、
小柳 礼恵、三浦 由佳、光田 益士、中井 彩乃、玉置 美春

博士課程３年　石亀 敬子、影浦 直子、河裾 永恵、富田 元、山本 駿

博士課程２年　田村 茂、小笠原 ゆかり、桂川 清多、前田 初美、松田 奈々

博士課程１年　齋藤 裕也、北野 ゆりか、相原 晶子、遠藤 真穂、沼田 悠希

修士課程２年　酒井 沙藍、田中 悠偉人、内藤 千尋

修士課程１年　河西 将志、小林 南菜子、又吉 真由美、伊藤 千佳

２）概要

Ⅰ．文献を読む力をつけるために、文献を精読する機会を提供する。さらに、教育に関する報告書やガイドラインなどを読む機会を提供する。そのことにより、看護教育を取り巻く現状を理解し、研究テーマを見いだすことを支援する。

Ⅱ．文献のクリティークを通して、看護教育学研究ならびに社会実装看護研究を進めるために必要な知識とクリティカルな思考を身につけられるよう、支援する。その過程で、研究を進める中で生じる疑問や課題を解決するための能力を養えるよう、課題を提示する。

Ⅲ．研究課題を明確化し、研究計画を作成する。次に、作成した研究計画を倫理委員会に提出し承認を得る。さらに、研究を実施し参考論文を作成し公表するとともに、修士・博士論文としてまとめ、発表を行う。

３）内容

研究報告、論文紹介、論文クリティークを準備、発表、ディスカッション

基本的にオンライン（Teams）にて実施した。

（＊8/25 は対面でゼミを実施した：3 号館 501 講義室）

４）2025 年開講日時　（日時はすべて、月曜日 6，7 限：18:00-21:10）

2024 年度

1 月 6, 20, 27 日／2 月 3, 10, 17 日／3 月 3, 10, 17 日

2025 年度

4 月 21 日,28 日／5 月 12, 19, 26 日／6 月 2, 9, 16, 23, 30 日／7 月 7, 14, 28 日

8 月 4, 18, 25*日／9 月 22, 29 日／10 月 6, 20, 27 日／11 月 10, 17 日

12 月 1, 8,15 日

写真 4-3-1.　2025 年 4 月入学式のセンターゼミ一同

左から前列：北野・齋藤・河西・小林・又吉・伊藤・相原・沼田・遠藤
後列：小柳・村山・須釜・竹原・光田・中村・中井・キム・皆川・三浦

５．社会的活動実績

５－１．主な学会での活動

【学会での役割】

〈看護実践学会〉

村山陵子,須釜淳子	
役割	査読委員
成果	看護実践学会誌発行に向けた論文査読に貢献した

〈日本看護科学学会〉

村山陵子	
役割	査読委員，Japan Journal of Nursing Science 編集委員
成果	日本看護科学学会誌発行に向けた論文査読に貢献した JJNS 発行に向け Subject Editor を務めた
小柳礼恵	
役割	看護ケア開発・標準化委員会　看護ケアのための高齢者排尿促進法（Prompted Voiding:PV）（診療）ガイドラインパネルメンバー
成果	ガイドライン作成に貢献した

〈国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会〉

須釜淳子	
役割	理事長

〈日本褥瘡学会〉

須釜淳子	
役割	理事長
光田益士	
役割	評議員、在宅褥瘡予防に関するアドホック委員
成果	第 27 回日本褥瘡学会の中で、在宅褥瘡予防に関するアドホック委員会企画を実施
小柳礼恵	
役割	評議員

〈日本褥瘡学会　中部地方会〉

須釜淳子	
役割	監事

〈日本創傷・オストミー・失禁管理学会〉

須釜淳子	
役割	副理事長（～2025 年 6 月）、編集委員会委員長（～2025 年 6 月）、評議員
成果	学会誌発行
村山陵子	
役割	評議員、査読委員
成果	学会誌発行に向けた論文査読に貢献した。
小柳礼恵	
役割	理事、学術教育委員会（排便担当）、評議委員、第 34.35 回学術集会組織員
成果	排便管理講習会の実施、排便管理に関するチーム医療の評価（エビデンス研究）

〈日本創傷治癒学会〉

須釜淳子	
役割	理事、COI 委員会委員長
光田益士	
役割	評議委員

〈看護理工学会〉

須釜淳子	
役割	理事長（～2025 年 8 月）監事（2025 年 9 月～）
村山陵子	
役割	評議員、編集委員（～2025 年 8 月）、学術委員、関連学会連絡委員
成果	学術委員会プロジェクトで活動（「看護学生のためのエコーを用いるフィジカルアセスメント技術導入促進プロジェクト」）
光田益士	
役割	評議員 、将来構想委員 、編集委員
成果	学会誌発行に向けた論文の査読を実施した

＜日本助産学会＞

村山 陵子	
役割	査読委員、代議員
成果	学会誌発行に向けた論文査読に貢献した

＜日本老年泌尿器学会＞

小柳礼恵	
役割	評議委員、教育委員会

＜日本小児ストーマ・排泄・創傷管理研究会＞

小柳礼恵	
役割	世話人

＜日本摂食嚥下リハビリテーション学会＞

三浦由佳	
役割	評議員、編集委員

〈日本 VAD コンソーシアム〉

村山陵子	
役割	評議員
成果	「輸液カテーテル管理の実践基準」改定作業に貢献し 2025 年版出版に至った

〈日本血管内留置カテーテル研究協議会〉

村山陵子	
役割	顧問

５－２．主たる活動実績

１）　病院看護研究支援

【研究活動支援】

（１）論文投稿支援

藤田医医科大学教育病院看護部の看護師が筆頭著者となる論文投稿支援を個人指導の形式で行った。掲載、採択、査読状況は以下のとおりである。

英語論文１編掲載、１編採択、和文（原著）3 編

和文（実践報告）1 編掲載、１編査読中

（２）病院職員依頼共同研究：マッチング

2025 年 2 月末現在

・論文投稿済み：1 編

・研究実施中：12 件

（３）藤田研究支援チーム「るぴ&Lab.」

藤田医科大学４拠点病院、社会実装看護創成研究センター、看護学科が協働し、看護研究活動を支援するしくみづくりを促進するため、次のような目的でチームを 2023 年度末に設立した。毎月１回のミーティングを開催し、下記 1)～5)の役割を遂行している。

目的

１．藤田医科大学における看護研究の質を高め，藤田ならではの看護の発展に貢献するために，病院看護部と社会実装看護創成研究センター・大学看護学科との看護研究の協働・連携を深める

２．相互の連携を図りながら、臨床看護研究を促進、さらに指導できる人材を育成する

役割

1) 病院で看護研究を実施するためのマニュアルの作成
2) 研究支援希望者の把握
3) 各拠点病院、センター、看護学科の共同研究のマッチング
4) 研究進捗状況の把握
5) 看護部研究支援チームメンバーの育成

チーム内組織のメンバー（2025 年度）

第１：宮下 照美 看護長　　第２：水谷 多紀子 看護長
第３：竹腰 加奈子 看護長　　第４：三浦 慎太郎 看護副主任
社会実装看護創成研究センター 村山 陵子　小柳 礼恵　三浦 由佳　光田 益士
保健衛生学部看護学科（第１教育病院との連携ワーキング）竹原 君江

今年は、第 29 回日本看護管理学会のインフォメーションエクスチェンジを企画し、2024 年度の活動を中心に、他施設へ情報提供を行った。（図 5-2-1）

演題名：「私たち一緒に研究やってます! 看護部と大学看護学科との研究コラボ by“るぴ×Lab.”」
内容：「藤田医科大学関連病院における看護研究ニーズ調査と今後の課題」
看護部長 髙井亜希
「藤田看護研究支援チーム“ルピ×Lab.”」　教授 村山陵子
「臨床からるぴ×Lab.へ繋げる～るぴ×Lab.担当者の立場から～」看護長 宮下照美
「臨床からるぴ×Lab.へ繋げる～るぴ×Lab.支援者の立場から～」准教授 小柳礼恵
会場の参加者と意見交換（質問への回答結果とともに）
進行 看護長 竹腰加奈子、水谷多紀子

約 40 名程度の参加者数であった。会場からは「体制」をどう組んだらよいか、ということ

よりも、どのように看護師が研究していけるように動機付けするか、そして時間のかかる「研究」にどのように継続的に、最後まで取り組めていけるようにしたらよいか、というところが課題であることを共有できたと考える。

我々も、まさに、これまで開始された研究が最後まで遂行でき、成果が発表され、現場の看護実践に活かされる、そして次への研究のモチベーションにつながる、という好循環が生まれるよう尽力していこうと、決意を新たにすることができた。（報告書より抜粋）

図 5-2-1. 学会で配布した企画案内チラシ

2）「拠点間合同 がん看護チーム」支援活動

がん看護の質向上を目的として、2021 年 9 月に 4 病院（藤田医科大学病院、ばんたね病院、七栗記念病院、岡崎医療センター）と社会実装看護創成研究センターとが連携し、がん看護チームを構築した。

がん看護チームの活動目的は「各拠点のがん分野専門・認定看護師が、藤田のがん看護の質向上を目指し活動を行う」ことであり、2025 年度は、「がん看護研修」をチーム活動に含めて取り組んでいくことを明記し、がんに関する研究・教育の実施、情報提供、各施設の取り組み内容の可視化と共有を行うことに焦点をあてて取り組んだ。

定例会議は隔月 1 回のオンライン会議であった。4 病院のがん分野の認定看護師・専門看護師 16 名（がん専門看護師、がん性疼痛看護認定看護師、がん化学療法認定看護師、がん放射線療法看護認定看護師、緩和ケア認定看護師、乳がん認定看護師、皮膚排泄ケア認定看護師、摂食嚥下障害看護認定看護師）が主軸となって運営し、社会実装看護創成研究センターの須釜、村山が学術活動への支援を行った。

当センターからは、看護師が末梢静脈カテーテル留置時にエコーを活用することによる看護師・患者に及ぼす影響・効果を検証する研究計画立案を 4 病院共同で進め、一括して倫理申請し承認を受けた。今後も、エコー導入による臨床における効果の実証研究の実施を支援する。

また、チームではメンバー全員が研究、症例報告、実践報告等、1 件以上発表するという目標を掲げており、当センターでは、発表や論文作成を可能な限り支援している。2025 年内は学術集会発表 6 件を支援し、うち 1 件は、第 22 回日本乳癌学会中部地方会にて優秀演題賞を受賞した。（河村愛，村山陵子．乳がん看護認定看護師による患者面談の現状と今後の課題）

今後も、がん看護分野における Fujita 看護をしっかりと確立するとともに、国内外のがん看護の質向上を目指せるようなチーム活動をサポートしていく。

３）排便サポートチーム活動

高齢者を対象とした排便ケアに関するチーム医療の普及・国立研究開発法人長寿医療研究センター 排便サポートチームのメンバーとして超高齢化社会が進む中、認知機能が低下した高齢者のニーズと医療者のアセスメントにより患者へ適切な排便ケアの提供が課題となっている。 その課題を解決するために上記施設と協働して排便ケアの質の向上と推進を実施している。

また、藤田医科大学４拠点病院の皮膚・排泄ケア認定看護師、排便障害患者が多く入院する病棟看護師が「次世代看護教育研究所エコーを用いた排泄ケアコース」を受講している。エコーを活用した排泄ケアを普及し、排泄管理の質向上のためのチーム活動の啓発を引き続き実施する予定である。

４）リハビリテーション科とのリンパ浮腫管理の実践と研究活動

藤田医科大学リハビリテーション科と社会実装看護創成研究センターと協働し、2022 年 1 月にリンパ浮腫管理の質向上を目的としたチーム“CARE Project”を発足し、継続している。CARE Project チームメンバーは、リハビリテーション科ではリハビリテーション医学専門の医師である大高洋平教授・尾関恩准教授、理学療法学専門の小山総市朗講師をはじめ、理学療法士、作業療法士らと、社会実装看護創成研究センターの須釜、臺から成る。設立して以降、毎月 1 回の定例会議を実施しており、現在はハイブリッド形式で継続している。定例会議では、研究進捗報告、リンパ浮腫管理症例報告、リンパ浮腫エコーアセスメントの画像提示とフィードバック、アウトカム検討といった内容についてディスカッションを図っている。

なお、CARE Project の取り組みと成果について、チームメンバーと共に学会発表を行った（第 9 回日本リンパ浮腫学会総会）。

【上肢リンパ浮腫 QOL 評価研究】

上肢リンパ浮腫 QOL 評価（LYMQOL 上肢版の日本語版作成）を、社会実装看護創成研究センター・リハビリテーション科・看護学科（キム・チュウアイ助教主導）と協働して開始し、今年度、論文掲載に至った。

５）勉強会の実施

【英語論文抄読会】

看護学科教員有志と月1回英語論文抄読会を開催した。12月末段階で通算51回実施した。参加人数は15名である。若手教員2名が交代で論文を紹介し、参加者間でディスカッションを行った。

【次世代看護研究会】

普段は異なる環境や立場で研究活動に従事しつつも、看護理工学に基づく共通の理念を有する者が交流を深め、ディスカッションを通じて互いに高め合い、ひいては次世代の看護学の発展に資することを目的とした研究会が、2022年から発足した。特に次世代の看護を担う若手研究者の育成に重点をおくものとされた。

＜参加校の代表者＞
石川県立看護大学：真田 弘美 学長・教授、紺家 千津子 教授
金沢大学：大桑 麻由美 教授
東京大学：仲上 豪二朗 教授
藤田医科大学：須釜 淳子 教授
横浜市立大学：赤瀬 智子 教授

＜次世代看護研究会企画ワーキンググループメンバー＞
石川県立看護大学：峰松 健夫 教授
金沢大学：大江 真琴 教授
東京大学：仲上 豪二朗 教授
藤田医科大学：村山 陵子 教授
横浜市立大学：玉井 奈緒 教授

＜第4回次世代看護研究会＞
実行委員：横浜市立大学（赤瀬智子、玉井奈緒、高橋聡明、堀江良子）
日　　時：2025年8月31日(日) 9:00～17:00
場　　所：横浜市立大学みなとみらいサテライトキャンパス
参 加 費：無料
開催形式：対面形式
参 加 校：藤田医科大学，石川県立看護大学，金沢大学，東京大学，横浜市立大学
参加者は合計73名で、発表者は34名であった。本学からは、教員7名、大学院生9名が参加し、修士課程2名、博士課程3名が1人20分（10分プレゼンテーション、10分質疑）で発表した。（写真5-2-1）

写真 5-2-1. 第 4 回次世代看護研究会集合写真

６．外部資金獲得

【科学研究費助成事業（科研費）研究代表者分】（金額は2025年度）

1. 基盤研究（B）
   ドセタキセル療法に関連する下肢浮腫への薬理作用機序に基づく先制予防ケアの開発
   2023年度～2025年度　須釜 淳子（代表）　2,400千円
2. 基盤研究（B）
   NICUにおける末梢静脈カテーテル関連の有害事象発症予防ケア基準の開発と普及
   2024年度～2027年度　村山 陵子（代表）　2,700千円
3. 基盤研究（B）
   在宅でのエコーを用いた嚥下視える化データベースに基づく介入の肺炎予防効果の検証
   2022年度～2025年度　三浦 由佳（代表）　1,400千円
4. 基盤研究（C）
   アドバンストスキンケア開発を目指した失禁関連皮膚炎と細菌バイオフィルム形成の関連
   2023年度～2025年度　光田 益士（代表）　1,100千円
5. 若手研究
   急性期病院における１日に必要な“看護師の人数・看護師情報”予測スケールの開発
   2022年度～2026年度　小柳 礼恵（代表）　520千円
6. 挑戦的研究（萌芽）
   摂食嚥下障害患者の食べる力を見守り回復させるリカバリースプーンの開発
   2025年度～2027年度　三浦 由佳（代表）　1,000千円

【その他の助成金】

1. 共同研究（日本製紙クレシア株式会社）
   2022年度～2025年度　須釜淳子、光田益士　金額非開示
2. 受託研究契約（アルケア株式会社）
   2022年度～2025年度　光田益士　金額非開示

７．研究業績

【論文】

1. Takahashi T, Nakagami G, Murayama R, Abe M, Sanada H. Ultrasonography-Observed Subcutaneous Edema Immediately After Peripheral Intravenous Catheter Placement Is a Factor in Subsequent Catheter Failure. J Infus Nurs. 48(4): 268-274, July/August 2025. DOI: 10.1097/NAN.0000000000000595
2. Takahashi T, Nakagami G, Murayama R, Abe M, Matsumoto M, Sanada H. Automated ultrasonographic detection of thrombus and subcutaneous edema due to peripheral intravenous catheter. J Assoc Vascular Access. 2025; 30(2): 27-32.
3. Kohta M, Takahashi M, Koyanagi H, Sugama J. Evaluating the knowledge level, practice, and behavioral change potential of care managers in pressure injury prevention using a mobile app prototyping model in the home-care setting: single-arm, pre-post pilot study. JMIR Form Res.2025; 9: e57768.
4. Mawaki A, Kohta M, Yoshimura A, Nakatani T, Nagao S, Sugama J. Effect of docetaxel administration on fluid dynamics in mice. Fujita Med J. 2025; 11: 59-63.
5. 梶川 智弘，光田 益士，西田 梨恵，須釜 淳子. 新型コロナウイルス感染症（COVID－19）の５類移行後における看護職員の手荒れ有訴率と関連因子. 環境感染誌. 2025; 40: 46-52.
6. Ueda T, Ichihashi S, Dai M, Sugama J, Kobayashi N, Nakagami G, Sanada H. Educational needs of health care professionals managing genital edema/lymphedema: findings from a survey in Japan. Lymphoedema Res Practice. 2024; 12: 21-32.
7. 野村 有香, 三鬼 達人, 本多 吾也子, 林 雅子, 中島 由貴, 松浦 広昴, 須釜 淳子. 窒息事例から食事開始プロトコールを導入して：整形外科病棟での取り組み. 日摂食嚥下リハ会誌. 2025; 29: 22-26.
8. Abe M, Murayama R, Abo Y, Ikeda M, Nakagami G, Sanada H. Qualitative assessment of nurses' experiences learning and practicing ultrasound-guided peripheral venous catheter placement techniques. J Nurs Sci Engineer. 2025; 12: 288-298.
9. Tamura S, Miura Y, Kohta M, Ikoma T, Ishitani T, Mano K, Sugama J. Beds with angle indicators and head lift function contribute to appropriate angles during eating and a low prevalence of pharyngeal residue. Advanced Robotics. 2025; 39(15): 959–969.
10. Watanabe N, Miura Y, Sanada H, Kamakura Y. Ultrasonography of the process of esophageal speech in three laryngectomy cases. Med Ultrason. 2025; 27(4): 392-399.
11. 吉永 尚紀，須釜 淳子，加澤 佳奈，池田 真理，新福 洋子，田中 マキ子，友滝 愛，仲上 豪二朗，深堀 浩樹， 横田 慎一郎．COVID-19 感染拡大が日本看護科学学会会員の研究活動に与えた影響: CPOVID-19 看護研究等対策委員会の活動成果から考える研究・学術推進．日本看護科学会誌. 2025; 45: 189-199.
12. 鈴木 華代，祖父江 嘉洋，川崎美瑞良，杉浦 貴子，佐野 克明，田﨑 敦子，相原 晶子，須釜 淳子．カテーテル心筋焼灼術電極貼付部における皮膚障害とその発生要因．日

本創傷・オストミー・失禁管理学会誌. 2025; 29: 1-10.
13. Kawabata T, Sugama J. Decreasing maximum interface pressure in the lateral position by investigating optimal mattress internal air pressure using an oval buttocks model. Chronic Wound Care Manag Res. 2025; 12: 1-13.
14. 城月 雅大，仁木 一順，須釜 淳子，大岩 昌子，大槻 知史，牛田 享宏，廣田 政古，片方 容子，舟橋亜矢．最期の食事を再考する：拡張現実を通じたガストロノミ―体験が死に直面した人々にもたらす精神的、倫理的、文化的意義の統合的検討．Artes MUNDI. 2025; 10: 83-103.
15. Shirotsuki M, Niki K, Sugama J, Oiwa S, Otsuki S, Ushida T, Katagata Y, Funahashi A. Reimaging end-of-life care: the promise of VR-enhanced gastronomy. Progress in Paliliative Care. 2025; 33: 67-68.
16. Shirotsuki M, Sugama J, Otsuki S, Niki K, Oti L, Oiwa S, Ushida T, Exploring the impact of virtual gastronomic tourism on eating experience. Int J Palliative Nurs. 2025; 31: 318-324.
17. Abe M, Takahashi T, Muta M, Kawamoto A, Murayama R, Nakagami G. Evaluation of a dressing film for ultrasound-guided vascular puncture to achieve high-quality imaging and infection prevention. J Ultrasound. 2025; 28(4): 925-930.
18. 髙井 亜希, 小柳 礼恵, 佐野 友香, 眞野 惠子. 大学附属病院における看護管理者の看護研究のニーズ調査と課題—看護系大学研究部門とのユニフィケーション—. 日本看護管理学会誌. 2025; 29(1): 28-37.
19. 川村 享平, 古庄 衣里, 立山 沙耶花, 南山 慶伍, 長谷川 隆史, 小柳 礼恵, 須釜 淳子. 排便ケアに難渋する C4 頚髄損傷者に対し、ポータブルエコーによる S 状結腸の便貯留状態の可視化が有効であった 1 例. 日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌. 2025; 29Supl: 46-51.
20. Sano Y, Sugama J, Koyanagi H, Murayama R, Ishihara T, Mano K. Nurse competencies in defecation assessment related to constipation prevalence in a university hospital. J. Jpn. WOCM. 2025; 29: 27-40.
21. 松本 勝，玉井 奈緒，三浦 由佳，真田 弘美．エコーを活用した便秘時のアセスメントとケア，日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌, 2025, 29Supl: 1-10.
22. Nakai A, Shimizu M, Katogi M, Hamada M, Sonoda N, Urai T, Takahashi T, Dai M, Ishimitsu F, Miura Y, Aoki M, Teshima T, Kitamura A, Amemiya A, Itokawa B, Suzuki C, Tanaka R, Mori T, Ishinuki T, Mugita Y, Matsumoto M, Tamai N, Ota E, Sugama J. Constipation detection accuracy of ultrasonography for elderly people with difficulty in communicating symptoms in nursing care: A systematic review and meta-analysis. J. Jpn. WOCM. 2025; 29Supl: 11-24.
23. 小柳 礼恵, 松浦 俊博, 竹内 さやか, 山田 理, 永吉 広奈, 須釜 淳子. 認知症病棟入院患者を対象とした排便サポートチームの活動の実際, 日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌, 2025, 29 Supl: 58-63.
24. Dai M, Nakagami G, Kobayashi N, Sato A, Sakuda H, Yoshizawa T, Masujima M, Arai Y, Ueda T, Isjihashi S, Imakata Y, Nprregaard S, Moffatt C, Sanada H, Sugama J. Recognition of guidelines and outcome measures for lymphoedema management among healthcare professionals in Japan: a

cross-sectional survey. Lymphoedema Res Practice. 2025; 12: 41-49.

25. Jin Q, Shimizu M, Dai M, Yoshizawa T, Sato K, Otaka Y, Ozeki M, Koyama S, Okoch Y, Nakano N, Suzuki M, Usami M, Sugama J. Reliability and validity of the quality-of-life measurement for limb lymphedema (LYMQOL) for Japanese women with upper extremity lymphedema. Lymphoedema Res Practice. 2025; 12: 50-58.
26. Watanabe T, Li J, Grace Torii M, Miura Y, Dai M, Nakagami G, Hirai S. Current state and future perspectives on robotic technology for improving efficiency of nursing care. Advanced Robotics. 2025; 1-24.
27. Yokono T, Sugama J, Saitoh A, Abeywickrama HM, Sanada H. Competencies required for hospital-based wound, ostomy, and continence nurses to provide PI care in home care in Japan: a mixed-methods study. J Adv Nurs. 2025. https://doi.org/10.1111/jan.70391
28. Tano M, Kohta M, Yano Y, Sugama J. Reducing the frequency of hand hygiene to maintain skin integrity among nurses in the growing care unit: A pilot study. Fujita Med J 2025; 11(3): 135-141.
29. Shoji Y, Suzuki K, Kohta M, Tamai N., Current status and challenges of planetary health education: a research protocol for a scoping review. JMIR Res Protoc, 14: e70910. 2025

【学会発表】

1. 竹差 美紗子，三浦 由佳，石亀 敬子，河裾 永恵，須釜 淳子．エコーを用いた排泄ケアが在宅および施設での多職種連携に与える影響．第 1 回日本保健衛生教育学会学術集会，愛知，2025.3.15.
2. Mawaki A, Kohta M, Yoshimura A, Haneda C, Nakatani T, Nagano S, Sugama J. Measuring evans blue-bound alubumin leakage potentially as an indicator for eary edema detection using docetaxel-injected mice. The joint EWMA-GNEAUPP 2025 conference, Barcelona (Spain), 2025.3.27.
3. 光田 益士，矢倉 里香，柏　真紀子，渡邉 三香子，西川　圭二，小柳　礼恵，塩地 由美香，松嶋　文子，須釜　淳子．脳卒中入院患者におけるウレアーゼ産生菌検出による失禁関連皮膚炎の発生予測．第 34 回日本創傷オストミー・失禁管理学会学術集会，pp201，山形，2025.6.20.
4. 光田 益士，須釜 淳子．Staphylococcus aureus のバイオフィルム形成に対する弱酸性皮膚洗浄剤の添加効果．第 34 回日本創傷オストミー・失禁管理学会学術集会，pp207，山形，2025.6.20.
5. 三浦　由佳，森田　光治良，仲上　豪二朗，北村 言，須釜　淳子，真田　弘美．特定行為研修修了者の増加が急性期病院の新規褥瘡発生率の減少に及ぼす効果．第 34 回日本創傷オストミー・失禁管理学会学術集会，pp229，山形，2025.6.20.
6. 河﨑 明子，小柳 礼恵，須釜 淳子．臀部周囲の体圧可視化マットレスに対する看護師の受容性．第 34 回日本創傷オストミー・失禁管理学会学術集会，pp241，山形，2025.6.20.
7. 佐野 友香，眞野 惠子，光田 益士．昼夜遷移の少ない勤務における新人看護師の勤務への満足度と影響要因．第 29 回日本看護管理学会学術集会，北海道，2025.8.22.
8. 齋藤 祐也，小柳 礼恵，眞野 惠好，村山 陵子．中間看護管理者への承認行為能力向上

を狙った教育プログラムの評価．第 29 回日本看護管理学会学術集会，北海道，2025.8.22.

9. 横田 慎一郎, 須釜 淳子. 悉皆調査データの分析からみた病院での褥瘡発生の実態. 第 27 回日本褥瘡学会学術集会, 横浜, 2025.8.29.
10. Koyanagi H, Igarashi C. How Japan's unique approach to medical tourism bridges culture and care in patient journeys. Hospital Management Asia 2025, Ho Chi Minh, Vietnam, 2025.9.11
11. 堀田 由季佳, 小柳 礼恵, 岸野 由里, 藤井 由美子, 乗松 周子, 須釜 淳子. 緩和ケア病棟入院患者における QOL 評価の活用方法の検討―2 種の QOL 評価ツールを用いた事例研究―. 第 56 回日本看護学会学術集会, 名古屋, 2025.9.14.
12. 野田早智恵，神納美保，村山陵子，須釜淳子．再発乳がん患者のエコーを用いた末梢静脈カテーテル留置による治療継続．第 22 回日本乳癌学会中部地方会，愛知，2025.9.20
13. 近藤千恵，村山陵子．緩和ケアチームが介入した終末期乳がん患者への意思決定支援に関わった一例．第 22 回日本乳癌学会中部地方会，愛知，2025.9.20
14. 河村愛，村山陵子．乳がん看護認定看護師による患者面談の現状と今後の課題．第 22 回日本乳癌学会中部地方会，愛知，2025.9.21
15. 宮坂久美子，森谷美夏，河本友里，宮城麻菜美，杉浦愛佳，村山陵子．フェスゴ®の疼痛を発症した患者に対する治療選択への支援．第 22 回日本乳癌学会中部地方会，愛知，2025.9.21
16. 水谷洋，山田智恵，村山陵子．男性乳がん患者の喪失感とセクシュアリティへの理解－ラザルスのストレス・コーピング理論をもとに．第 22 回日本乳癌学会中部地方会，愛知，2025.9.21
17. 宇野みゆき，村山陵子．10 年間がん治療を続けてきた乳がん患者の症状緩和及び QOL の向上に対するケアを病みの軌跡モデルから捉えた一考察．第 22 回日本乳癌学会中部地方会，愛知，2025.9.21
18. 山崎栄晴，小島由紀子，生川理恵，江端夕希奈，松井孝之，神谷正樹，竹内さやか，小柳礼恵，加賀谷斉，松浦俊博，林次郎，山辻知樹，秋山隆．排便アセスメントに基づき薬物療法と運動療法の導入により 排便状況が改善した 1 症 ．第 5 回慢性便秘エコー研究会，東京，2025.10.25.
19. 眞玉 茂幸，高橋 美貴，前川 加名子，宮下 照美，小柳 礼恵，須釜 淳子，松岡 宏，森田 功．遷延性意識障害患者に NASVA 排便ケアフローチャートを用いた取り組み． 第 5 回慢性便秘エコー研究会，東京，2025.10.25.
20. 小笠原 ゆかり，藤田 佳子，押本 由美，森 裕介，渡久地 麻衣子，荒川 知世，新見 綾子，村山 陵子．初めて人に穿刺する看護学生の超音波検査装置を用いた静脈血採血実施時の生理学的評価−採血成功者と失敗者の比較−．第 13 回看護理工学会学術集会，滋賀，2025.11.8.
21. 稲熊 清人，三浦 慎太郎，小柳 礼恵．救急外来（ER）から緊急入院する患者における ER 滞在時間延長の要因-ER 運用に焦点をあてて-．第 13 回看護理工学会学術集会，滋賀，2025.11.9.
22. 佐野 友香， 光田 益士，眞野 惠子，須釜 淳子．昼夜遷移回数と看護師の睡眠・疲労・

活力との関連．第 13 回看護理工学会学術集会，滋賀，2025.11.9.

23. 渡邉 直美，鎌倉 やよい，三浦 由佳，真田 弘美．喉頭摘出者の食道発声における音生成部位の成熟プロセスの可視化．第 13 回看護理工学会学術集会，滋賀，2025.11.9.
24. 佐野 友香，光田 益士，眞野 惠子，須釜 淳子．頻繁な昼夜遷移の回避が看護師の睡眠の質に及ぼす影響．第 45 回日本看護科学学会学術集会，新潟，2025.12.6.

【刊行物】

1. 長谷川 陽子，須釜 淳子．第 6 章疾患における栄養療法　8.褥瘡．病態栄養専門管理栄養士のための病態栄養ガイドブック（改訂第 8 版）．南山堂，東京，2025;283-287.
2. 須釜 淳子．褥瘡のリスクアセスメント・DESIGN-R®2020. 終末期の褥瘡．南山堂，東京，2025;44-49.
3. 須釜 淳子. 褥瘡をどうアセスメントする？　特集　門野編集長の褥瘡学会をそ～っと覗いてみてごらん　総説３　Part 1. 近年の褥瘡の流れを知る. J Visual Dermatol. 2025;24: 807-811.

【セミナー・シンポジウム・ワークショップ・交流セッション・学園発表】

1. 村山 陵子．ミッドラインカテーテルはライン管理の常識を変えるか？．第 8 回日本 VAD コンソーシアム研究集会，ランチョンセミナー，pp34，東京， 2025.1.26.
2. 村山 陵子．エコーを用いる点滴トラブル予防を目指した末梢静脈カテーテル留置技術．第 8 回日本 VAD コンソーシアム研究集会，講演III，pp.40，東京， 2025.1.26.
3. 村山 陵子．質と安全を可視化・保証するエコー技術のコツ．2024 年度看護師特定行為研修修了者向けスキルアップ研修，第I部：スキルアップ研修 最前線シリーズ，Web 開催, 2025.2.21.
4. 光田 益士. 皮膚組織内部への力の伝達抑制のための局所摩擦ずれ緩和シート「TASS®Ⅱ」第 4 回 日本フットケア・足病医学会 関東・甲信越地方会 企業共催教育セミナー, 東京, 2025.5.25.
5. 小柳 礼恵．ランチョンセミナー1：高齢者の排泄ケア再考 ーエコーの活用:便秘を可視化するー．日本老年看護学会第 30 回学術集会，千葉，2025.6.28.
6. 小柳 礼恵．ストーマケアと地域包括ケアシステム．第 38 回日本老年泌尿器科学会，シンポジウム 4 高齢者がん患者の排泄管理をみんなで考える，東京，2025.7.12.
7. 光田 益士．　持続的局所摩擦ずれ緩和シートを用いた慢性創傷ケアへの提案．日本フットケア・足病医学会第 6 回北海道地方会学術集会，企業共催セミナー.，札幌，2025.7.12.
8. 三浦 由佳，田村 茂，石亀 敬子，竹差 美沙子，河裾 永恵，須釜 淳子．誤嚥・咽頭残留を検出する車いす埋め込み型システムの開発．2025 年度　第 1 回研究マッチングフォーラム　～ みつける　つながる　ひろがる ～，愛知，2025.7.15.
9. Kohta M. Revolutionizing prevention: Mechanical simulation of five-layered soft silicone foam dressing with artificial skin model. Asia Pacific Wound Readers' Summit 2025. Kuala Lumpur, Malaysia, 2025.7.25.
10. 村山 陵子，小柳 礼恵，宮下 照美，竹腰 加奈子，三浦 慎太郎，水谷 多紀子，皆川 敦

子，加藤 睦美，竹原 君江，高井 亜希.「私たち一緒に研究やってます!－看護部と大学看護学科との研究コラボ by“るぴ×Lab.” 第 29 回日本看護管理学会学術集会，インフォメーション・エクスチェンジ 28，北海道，2025.8.22.

11. 小柳 礼恵. 予防的スキンケア：健やかな皮膚を保つためのケアとは. 第 27 回日本褥瘡学会学術集会，教育講演３，神奈川，2025.8.29.
12. 小柳 礼恵. ロボティックマットレスが看護の現場を変える. 第 27 回日本褥瘡学会学術集会，ランチョンセミナー1 未来の看護をつくる　研究・開発・社会実装，神奈川，2025.8.29.
13. 光田 益士. 1. 地域共創による褥瘡予防の実装科学：在宅におけるサステイナブルな褥瘡予防プログラムの実装：ケアマネジャーとの共創. 第 27 回日本褥瘡学会学術集会，委員会企画 11　在宅医療委員会　在宅褥瘡予防に関するアドホック作業部会企画，神奈川，2025.8.30.
14. 光田 益士. 2. 居宅介護支援事業所で働くケアマネジャーの組織準備性：在宅におけるサステイナブルな褥瘡予防プログラムの実装：ケアマネジャーとの共創. 第 27 回日本褥瘡学会学術集会，委員会企画 11　在宅医療委員会　在宅褥瘡予防に関するアドホック作業部会企画，神奈川，2025.8.30.
15. 河﨑 明子，小柳 礼恵，須釜 淳子. 体圧値の視覚的フィードバックが看護師の褥瘡ケアに関する知識と行動に及ぼす影響　～1 群事前事後比較～. 第 27 回日本褥瘡学会学術集会，委員会企画 13　Award・Grant 選考委員会企画 研究助成，神奈川，2025.8.30.
16. 三浦 由佳. 誤嚥と咽頭残留をリアルタイムに可視化するエコー技術の開発と普及. 第 31 回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会，パネルディスカッション 3，神奈川，2025.9.19.
17. 光田 益士. 術中褥瘡対策の科学：Mepilex® Border Protect による皮膚保護のメカニズム. 第 39 回日本手術看護学会年次大会，ランチョンセミナー，仙台，2025.9.20.
18. 村山 陵子. Vascular Access Device(VAD)選択にイノベーションを起こす―日本におけるミッドライン（サーフローMidela）への期待. テルモ WEB セミナー サーフローMidela 発売記念講演会，2025.9.30.
19. 森谷 美夏，宮坂 久美子，出羽 薫，宮城 麻菜美，河本 友里，大坪 千晴，キム 恵理子，杉浦 愛佳，村山 陵子. がん薬物療法目的の末梢静脈留置カテーテル留置の現状調査～超音波検査装置を用いた留置部位選択への取り組み～. 藤田医科大学 2025 臨床看護研究会，2025.10.18.
20. 三浦 由佳. はじめての看護エコー（嚥下エコー編）. 富士フイルムメディカル株式会社オンラインセミナー, 2025.10.21.
21. 光田 益士，須釜 淳子. 失禁関連皮膚炎患者の陰部皮膚表面由来の黄色ブドウ球菌のバイオフィルム系性能. 第 57 回藤田医科大学医学会学術大会，2025.10.24.
22. 竹原 君江，鈴木 美穂，四谷 淳子，村山 陵子，樋之津 淳子，松井 優子，高木 良重，巻野 雄介，村井 孝子，阿部 麻里，澤野 弘明.「看護学生のためのエコーを用いるフィジカルアセスメント技術導入促進」WG. 第 13 回看護理工学会学術集会，学術委員会

WG ワークショップ，滋賀，2025.11.9.

23. 村山 陵子．血管外漏出の発生要因と対策～穿刺困難症例にどう立ち向かうか～．REACT 2025~Ryukyu Echo-guided Access Clinical Training，沖縄，2025.11.29.
24. 光田 益士，中村 義徳，須釜 淳子．The simulated skin-shearing test を用いた力学的評価に基づくドレッシング材の選択支援．第 55 回日本創傷治癒学会，シンポジウム 3「看護の立場から見た創傷被覆材、創傷治癒デバイス」，大阪，2025.12.13.
25. 光田 益士，須釜 淳子．肥厚性瘢痕、ケロイド予防のための術後創部の伸展刺激の抑制： 貼付材形状の工学的検討．第 55 回日本創傷治癒学会，シンポジウム 4「肥厚性瘢痕、ケロイドと「つきあう」」，大阪，2025.12.14.

【受賞歴】

1. 2024 Fujita Medical Journal, Certificate of Excellence in Reviewing.
   Murayama R.
2. 日本創傷・オストミー・失禁管理学会 2025 年度学術論文優秀賞
   Takesashi M, Kohta M, Ishikame K, Miura Y, Sugama J. Association between incontinence-associated dermatitis and reduced quality of life in community-dwelling adult women with light urinary incontinence. J Jpn WOCM. 2024; 28:79-93.
3. 看護理工学会　実践報告・速報優秀論文賞
   村山陵子，阿部麻里．超音波検査装置を用いる末梢静脈カテーテル留置・固定のための新ドレッシングフィルムの開発．看護理工学会誌，2024；11:106-111.
4. 第 22 回日本乳癌学会中部地方会，優秀演題賞
   河村愛，村山陵子．乳がん看護認定看護師による患者面談の現状と今後の課題，2025/9/20-21，名古屋

資料

社会実装看護創成研究センター設立５周年記念シンポジウム
報告書

社会実装を志向した看護学研究の展開

2025年12月1日

藤田医科大学保健衛生学部社会実装看護創成研究センター
愛知県豊明市

藤田医科大学　社会実装看護創成研究センター設立５周年記念シンポジウム　報告書

目次

はじめに
・・・・・1

社会実装看護創成研究センター設立から５年間の歩み　センター長／教授・須釜淳子
・・・・・2

シンポジウム１　ケアの質を革新する看護技術の社会実装
司会　センター長／教授・須釜淳子
・・・・・4

シンポジウム２　看護職の知的実践を拓く：臨床現場と研究の架橋による人材育成
司会　センター教授・村山陵子
・・・・・11

シンポジウム３　看護部と創る臨床研究の新展開
司会　藤田医科大学病院看護部長・高井亜希、センター准教授・小柳礼恵
・・・・・18

講評　保健衛生学部長・長谷川みどり
・・・・・25

おわりに　センター長／教授・須釜淳子
・・・・・26

資料
・・・・・27

はじめに

本報告書は、2025 年9月6日藤田医科大学保健衛生学部３号館で開催された社会実装看護創成研究センター設立５周年記念シンポジウムにて発表された内容の要点を総括するものである。メインテーマを「社会実装を志向した看護学研究の展開：技術革新・人材育成・臨床連携の５年間の実績と展望」とした。当日は、看護学科教員、教育病院看護管理者、看護師など総勢 113 名が参加した。本報告書は、シンポジウム録音データからテキストに変換した文書ファイルを作成し、Microsoft365 Copilot を利用して要点をまとめたものである。

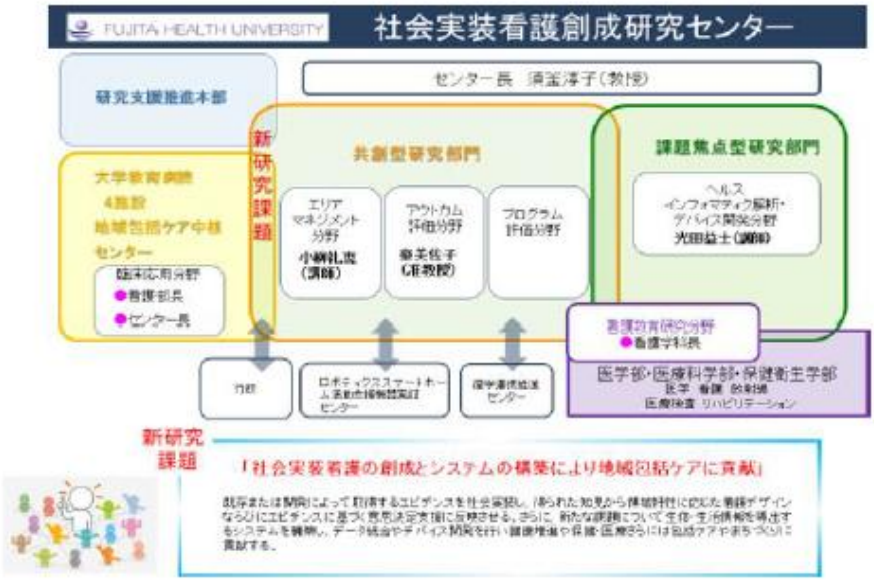
シンポジウム開催のねらいは、センターが蓄積してきた知見や取り組みを振り返り、「何を残してきたのか」を参加者とともに考える機会とすることと、大学組織の中に看護研究センターを持つことの意義についても、議論を深めたいことの２点であった。このねらいの下、同シンポジウムでは、３つのテーマが設けられ、各シンポジストが発表を行った。また、すべての発表終了後に、保健衛生学部長から講評がなされた。

シンポジウムに先立ち、藤田医科大学統括看護部長・眞野恵子氏より、社会実装看護創成研究センター設立５周年を祝し、日頃からの看護師への研究支援に対する深い感謝の意が表された。特に、臨床現場における研究活動の推進において、センターの存在が大きな力となっていることが強調された。得られた知見は看護実践に活かされ、患者ケアの質向上にもつながっている。臨床と研究の融合を実現する場として、センターの活動が着実に成果を上げていることが評価された。今後も、センターが地域社会や医療の発展に寄与し続けることへの確信が述べられた。看護部としても、研究と社会実装を通じて、より良い看護の未来を築いていく姿勢が示された。今後の協働への期待が込められた力強いメッセージであった。

社会実装看護創成研究センター設立から５年間の歩み

社会実装看護創成研究センター　センター長・教授　須釜淳子

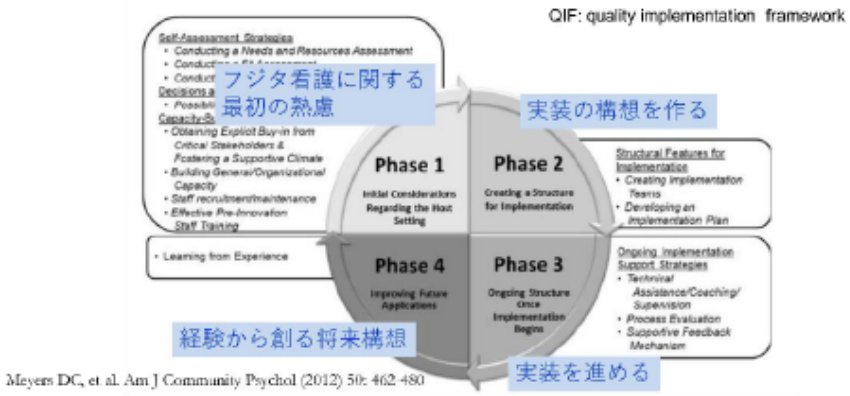
社会実装看護創成研究センターは、2021 年４月に設立され４名の教員（須釜、臺、小柳、光田）で活動が開始された。センターは、研究によるエビデンス創出部門と、そのエビデンスを社会に実装する共創型部門の２部門で構成されている。少人数体制であるため、部門間の明確な分離はなく、重なり合いながら協働的に研究活動を展開している。特に「エリアマネジメント部門」は、実装活動の中核を担っており、看護部との連携やエリアの共有・管理が重要な課題として位置づけられた。



センター設立に至った背景には、当時の学長・才藤栄一氏からの招聘があり、演者の恩師である真田弘美氏と才藤栄一氏とのご縁が契機となった。演者自身は、日本看護科学学会「摂食嚥下時の誤嚥・咽頭残留アセスメントに関する診療ガイドライン」作成の過程において、才藤氏が看護に対する深い理解と熱意を持っていることが確認され、藤田医科大学への赴任を決意した。着任時には、「藤田医科大学の看護のプレゼンスを高める」というミッションが与えられた。藤田医科大学は、全国でも早期に看護学の大学教育を開始した大学であり 50 年の歴史を有するが、全国的な認知度は高くなく、その向上が求められていた。着任時に金沢大学同門会から、日めくりカレンダーが贈られ、毎月１日に「あなたのリサーチマインドを藤田に根付かせてください」との真田氏からのメッセージが記されている。現在も初心を思い返すきっかけとなっている。

センターの具体的な活動として、藤田医科大学にある４つの教育病院を横断する看護研究システムの構築を目指した。病院組織と教育組織である保健衛生学部看護科をつなぐ役割としてセンターを位置づけ、研究運用体制を整備した。また、創傷看護や褥瘡研究の経験を活かしつつ、新たに「実装科学」という学問領域に挑戦した。エビデンスの普及を目的とした実装科学の進め方に基づき４フェーズを設定した。

実装科学の４ステップで進める



Meyers DC, et al. Am J Community Psychol (2012) 50: 462-480

着任直後には、コロナ禍にもかかわらず、眞野統括看護部長の配慮で、１週間で４教育病院を訪問し、看護部との信頼関係を構築した。以降、毎月１回の看護部との研究ミーティングを継続し、その中で看護研究ニーズ調査を実施した。また認定看護師との対話を重視し、初年度には 28 名からのヒアリングを実施した。過去の摂食嚥下機能障害看護分野で看護師が行った学会発表を英語論文化する支援を行った。これら病院看護部との連携活動は、第一教育病院・髙井亜希看護部長の論文に掲載されている（髙井ら、2025）。.

2022 年４月には２名の教員（村山、三浦）が着任し、活動をさらに加速させた。センター教員が主導し、臨床と連携した研究を推進した。具体的にはエコーを用いたフィジカルアセスメント、IAD 調査や４教育病院のがん看護を横断的に統合する活動など、多領域での研究が進行した。さらに、病院・大学・センターで臨床看護研究を支援するシステム「るぴ×Lab.」の構築により、研究情報の共有と支援体制が可視化され整備された。論文化支援も継続的に行われた。2022・2023 年度に訪問看護ステーションの協力を得て、内閣府事業として大型の研究プロジェクト「ポータブル超音波診断装置の活用による在宅ケアでの看護アセスメント社会実装」に取り組み、ポータブルエコーを活用した地域医療の変化を調査した。

看護学科との連携も率先して行い、英語論文抄読会開催、博士後期課程進学者のリクルートや科研費申請支援を行った。

センターの研究業績として、論文数の着実な増加、研究生・院生の増加が挙げられる。また客員教員が加わることで、センターの研究に広がりを見せた。センター設立から５年を迎え、次の５年に向けた構想として「経験から作る将来構想」を始動させる必要がある。これまでの活動を振り返り、次のステップを描くために、本シンポジウムを企画した。シンポジウム１・２・３には、これまでの実装が凝縮されており、今後の展開に向けた戦略を考える貴重な機会としたい。

文献

髙井 亜希, 小柳 礼恵, 佐野 友香, 眞野 恵子. 大学附属病院における看護管理者の看護研究のニーズ調査と課題―看護系大学研究部門とのユニフィケーション―. 日看管会誌. 2025; 29(1): 28-37.

シンポジウム１：ケアの質を革新する看護技術の社会実装

司会　社会実装看護創成研究センター　センター長・教授　須釜淳子

１．第６のフィジカルアセスメントツールとしてのエコー可視化技術の開発・普及：末梢静脈カテーテル留置技術

社会実装看護創成研究センター　教授　村山陵子

演者が取り組む「超音波検査装置（エコー）を活用した看護技術の実装」について紹介した。エコーは、視診・触診・聴診・打診・問診に続く「第６のアセスメントツール」として、非侵襲かつリアルタイムで体内の状態を可視化できるツールであり、近年では小型化が進み、携帯可能なサイズとなっている。

臨床現場ではエコーの有用性が認識されている一方で、実際の活用は進んでおらず、「エビデンス・プラクティス・ギャップ」が存在している。演者はこのギャップを埋めるべく、臨床と教育の両面からエコー導入に取り組んでいる。

藤田医科大学各拠点病院でのヒアリングから、末梢静脈留置カテーテルに関するトラブル、特に点滴漏れによるカテーテル中途抜去 （catheter failure：CF）が課題として浮上した。CF は腫脹や発赤を伴い、輸液継続が困難となり、カテーテルを抜去せざるを得ない状態であり、患者・医療者双方に負担をもたらす。藤田医科大学着任前に、看護理工学の視点から、エコーを用いて CF の原因を観察した研究を行った。その結果、血管内皮細胞の損傷による炎症反応が浮腫や血栓形成を引き起こしていることが判明した。特に機械的要因が看護技術と関連しており、以下の３点が介入可能なポイントとして整理された。１点目は大きい血管の選定、２点目は視診・触診が困難な場合でも穿刺成功、３点目は血管内でカテーテルが刺激を与えない留置である。これらをエコー技術で補うことで、CF の予防が可能となり、実際にアルゴリズム化された手順を看護師が実施した結果、CF の発症率が減少したことを報告した。

藤田医科大学着任後、眞野恵子統括看護部長、河田健司医師、神納美保看護長の協力のもと、藤田医科大学病院外来薬物療法センターで、実装科学の枠組みに基づき、以下のステップで実装を開始した。

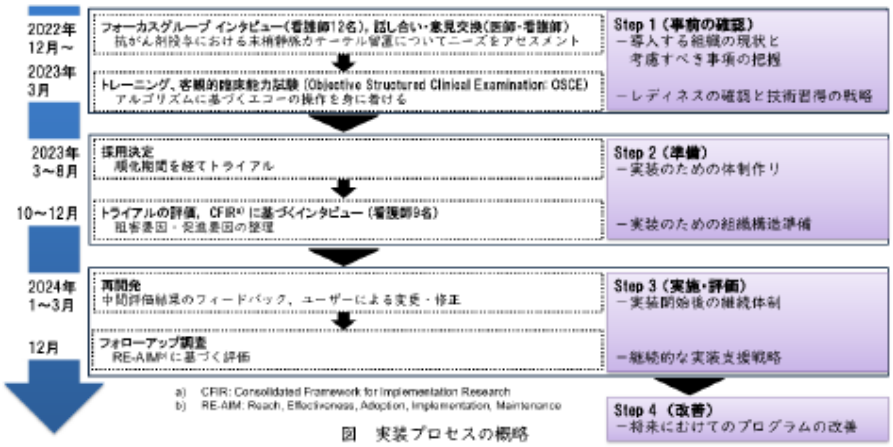
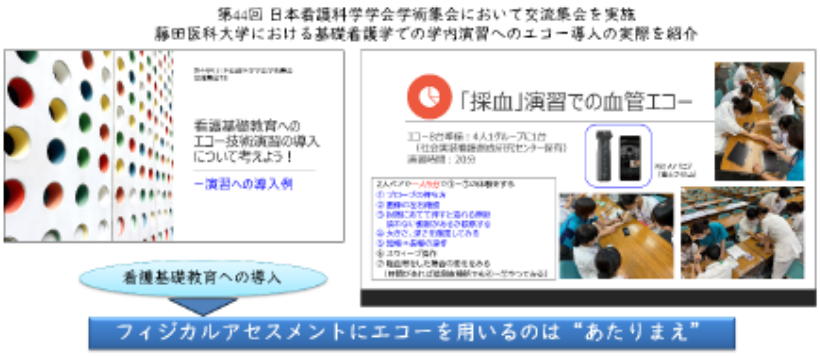


図　実装プロセスの概略

ステップ１：看護師 12 名へのフォーカスグループインタビューを実施。不安や緊張、エコーへの期待を把握し、トレーニングと技術評価（オスキー）を実施した。ステップ２：業務へのエコー組み込みトライアルを実施。使用タイミングの課題が発生し、看護師自身がアルゴリズムを更新した。ステップ３：CFIR に基づくインタビュー調査を実施。技術への自信の欠如、組織文化、リーダーシップ不足が阻害要因として判明。神納美保看護長が「チャンピオン」として体制整備を推進し、結果として肘窩への留置が減少、エコー使用率がほぼ 100%に達した。ステップ４：今後の展望として、血管温存と CF 予防のための技術を更新・改善しつつ実装を継続する。

さらに、令和６年度のコアカリキュラム改定により、看護基礎教育にエコー技術が明記されたことを受け、藤田医科大学での基礎教育におけるフィジカルアセスメントへのエコー活用として、教材開発や演習効果の検証を進行中である。今後、検証結果を公開し、他の大学へのエコー導入を目指していく。

教育側のニーズを確認し仲間を増やす



2．排泄ケアのイノベーション：多職種連携とテクノロジーで実現する尊厳ある排泄ケアの未来

社会実装看護創成研究センター　准教授　小柳礼恵

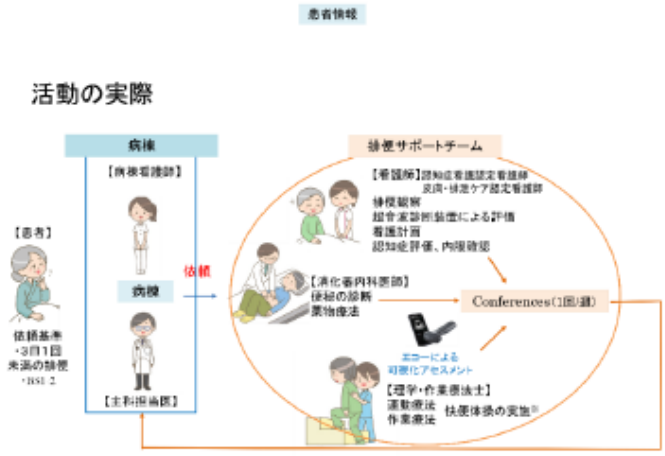
本講演では、演者が取り組む「排泄ケアのイノベーション」について、活動の背景、現在進行中の研究、そして今後の展望を紹介した。演者は看護師として 34 年、皮膚・排泄ケア認定看護師として 24 年の経験を有し、臨床・教育・研究の各領域で排泄ケアの質向上に尽力してきた。

看護師として消化器系、泌尿器科、小児病棟などで勤務し、皮膚・排泄ケア認定看護師として褥瘡管理や創傷ケアに携わってきた。博士号の学位取得後は、大学での教育・研究活動を通じて、知識・技術の継承とエビデンスの蓄積の重要性を認識した。教育者としては、学生の視野を広げ、臨床疑問を研究へと昇華させることを使命としている。

皮膚・排泄ケアの分野では、創傷、ストーマ、排尿ケアにおいて診療報酬の算定が進んでいるが、排便ケアに関しては未整備の状況が続いている。従来の排便アセスメントは、残便感・腹満など主観的評価が中心であり、便秘のタイプを正確に把握できず、不要な処置や薬剤投与が行われるケースがあった。この課題に対し、演者は超音波エコーを用いた非侵襲・ベッドサイドでの評価の有効性を提唱したエコーによる直腸内での便の貯留を可視化することで、医師・看護師・多職種が情報を共有し、適切なケア

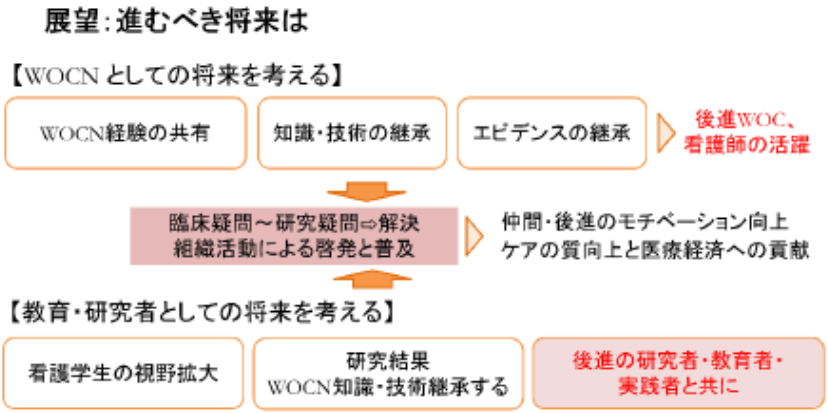
提供が可能となった。

演者は国立長寿医療研究センターにおいて、認知症病棟での排便ケアチームの構築に散り組んできた。認知症患者は便秘の訴えが困難であり、看護師が決まりきった仕事として、確実な便の存在を確認しないまま、坐薬挿入、摘便などの処置を行う現状があった。これらの処置が食欲低下や行動悪化につながるため、根拠に基づいたケアが求められていた。エコーによる便の貯留観察技術を導入し、医師・看護師・理学療法士が連携する体制を構築し、週１回の回診とカンファレンスで情報共有を行い、患者ごとのケア計画を策定している。認知症病棟に入院する便秘患者 55 名を対象に、約８カ月間の後ろ向き観察研究を実施した。主要アウトカムは「普通便の排便の有無」であり、介入の有無による排便率の違いを分析した。結果として、チーム介入により排便率が約２倍に向上した（Koyanagi et al, 2024）。エコーによる直腸観察は、CT では困難だったベッドサイドでタイムリーな直腸内の便貯留の確認を可能にし、治療評価にも有用であることが示された。



今後は、排便ケアのさらなる実践と評価を進め、診療報酬の新設を目指す。排便ケアに関する診療報酬獲得に向け以下の３要素が必要とされる。排便ケアに必要な知識・技術を持つ看護師の育成、排便管理に関するチーム医療体制の構築、チーム医療の効果検証である。2023 年より、学会主導で 16 時間以上の講習会を開催し、220 名以上の看護師が受講した。現在も診療報酬算定に向けた体制づくりが進行中である。また、令和６年度のコアカリキュラム改定により、看護基礎教育にエコー技術が明記されたことを受け、教材開発や演習効果の検証にも取り組んでいる。看護学生が早期からエコーに触れることで、将来的にエコーを活用した排泄ケアが「当たり前」となることを目指している。

演者は、排便ケアという看護技術の社会実装に挑戦しており、そのプロセスを段階的に進めることで、ケアの質の革新を図ってきた。今後も、後進の育成、仲間のモチベーション向上、医療経済への貢献を目指して活動を継続する意向が示された。最後に、共同研究に協力した第一教育病院の眞野統括部長、高井看護部長、佐野看護長、医師、大学関係者への感謝の意が述べられた。



文献

Koyanagi H, Matsuura T, Takeuchi S, Yamada S, Ishihara T, Sugama J. Evaluation of the health care team intervention for constipation in elderly patients with dementia. J Jpn WOCM. 2024; 28 (1): 49-56.

3．摂食嚥下の可視化がもたらす新たな食事支援

社会実装看護創成研究センター　准教授　三浦由佳

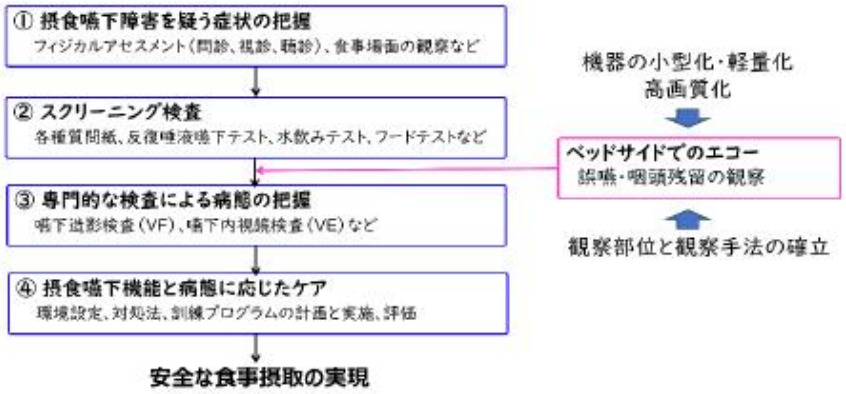
本講演では、演者が取り組む「摂食嚥下の可視化技術」による食事支援の革新について、研究の背景、技術開発、教育・普及活動、そして社会実装への挑戦が紹介された。

演者は看護師として病棟勤務中、誤嚥性肺炎で入退院を繰り返す高齢患者に多く接し、「口から食べることの尊さ」と「それを支える技術の必要性」を痛感した。大学院進学後、真田弘美教授の指導のもと摂食嚥下障害患者のケアについて研究を重ねた。2022 年 4 月に社会実装看護創成研究センターに着任後も、「いつまでも食事を楽しめる社会の実現」を目指し、研究に取り組んでいる。

着任前に、脳卒中後遺症で嚥下障害を有する、在宅療養中の高齢者のケアに携わる機会を得た。訪問看護師とともにエコーを用い摂食嚥下時の咽頭残留の観察を実施し、この高齢者は交互嚥下を行うことで、ムセや窒息、咽頭残留を解消し、安全な経口摂取が可能であることを確認した。高齢者は食べたいものを食べることができ満足するとともに、訪問看護師も達成感を得ることができた事例であった。しかし、この事例以降は、エコー用いた観察技術の活用が現場では途絶えており、「技術の社会実装の重要性」と「研究者一人では限界がある」ことを痛感した。

摂食嚥下障害の可視化には、咽頭残留や誤嚥の観察が不可欠であり、エコーを用いることで喉頭蓋谷や梨状窩などの残留部位をリアルタイムで確認可能である。非侵襲かつベッドサイドで使用できるエコーは、スクリーニングから専門的検査への橋渡しとして有効であり、嚥下内視鏡検査などとの併用により精度が向上する。

エコーでの誤嚥・咽頭残留の観察の位置づけ



教育面では、嚥下ケアコースの中級（自己学習と客観的臨床能力試験による評価）までの教育プログラムを整備し、健康人を模擬患者とした技術習得を支援している。一方、教育プログラム終了後の実装に課題が残った。具体的には、摂食嚥下機能が低下した対象者の読影の難しさや個人差である。技術習得後の支援として、オンデマンド型のフィードバックシステムを導入した。受講者が撮影した画像に対し専門家がコメントを返すことで、現場での技術定着と画像品質の向上を図っている。将来的には AI による読影支援の導入も視野に入れている。

大学院生が行ったインタビュー調査では、エコーを用いた嚥下ケアにより、経口摂取を可能とするケアの選択肢が増え、訪問看護利用者の納得感を得るケアが可能になったことが確認された。スタッフ側も評価への納得感、情報共有、振り返りの機会が増加したことが確認された。また、咽頭残留が多い場合であっても、エコーで確認し残留物の喀出を促すことで安全に食事を継続でき、肺炎の予防に成功した事例もあった。これらの事例に共通したことは、看護師が自ら画像を取得し、積極的にケアに活用したことであり、エコーの実装に重要な促進因子であることを強調した。

また、遠隔システムによる講習の導入により、対面が難しい状況でも技術習得が可能であることを紹介した。スマートグラスに付けたカメラで、受講生の視野を追うことができ、受講生の意図を確認しながら技術評価ができるシステムである。

遠隔でのOSCE

画像は撮影の許可を得ています

Zoomで藤田医科大学（評価者）と現地受験者をつないで実施
受験者が視線カメラ付きのスマートグラスを装着しエコーをZoomに接続
評価者はリアルタイムにエコー画像と受験者のプローブ走査を確認

現地受験者の様子　　評価者側のZoom画面

エコーを用いた嚥下ケアコースの受講者数・修了者数は順調に増加している。さらに、学部生や高校生への教育機会も拡大中である。大学院生や共同研究においても嚥下エコーの活用が進んでいる。

摂食嚥下の可視化技術は、食事の安全性と楽しみを支える重要なツールであり、技術開発のみならず、教育・支援・普及の仕組みを整えることで社会実装への道が開かれている。本取り組みは多くの支援者の協力によって成り立っており、演者は感謝の意を表するとともに、今後のさらなる展開に意欲を示した。

4．コンバージェンスサイエンスで挑む創傷・スキンケアイノベーション

社会実装看護創成研究センター　講師　光田益士

本講演では、「コンバージェンス（融合）」をキーワードに、異なる分野・技術・職種の交差によって生まれる新たな価値について、演者の研究活動を通じて紹介された。看護と工学、情報技術、企業との連携を通じた社会実装の取り組みが中心に語られた。

演者は、生体膜の脂質二重層に関心を持ち、分子構造や電荷制御の研究からキャリアをスタートさせた。プラスミノゲンという酵素に反応する生体材料を開発し、血栓溶解や創傷ケアへの応用に成功した。特許化された技術は、抗菌剤の徐放を制御する創傷被覆材として動物実験で安全性・有効性が確認され、感染予防と皮膚治癒の両立を実現した。

演者が看護分野との連携が進む中で、褥瘡予防に着目した。人工皮膚にセンサーを埋め込み、圧力とせん断応力を同時に計測するシステムを開発した。企業との協働により、褥瘡予防シート材の製品化に成功し、臨床現場では褥瘡や糖尿病性足潰瘍の症例に使用され、創閉鎖や再発防止に効果が確認された。

在宅ケア領域では、ケアマネジャー向けの褥瘡アセスメントスケールを開発した。医師や皮膚・排泄ケア認定看護師が使用する既存スケールと同等の精度を示し、現場での実用性を強調した。さらに、褥瘡の写真を撮影し、予防・治療計画を立案し、推奨材料まで提示するアプリを開発した。紙ベースからデジタルへの移行により、ケアの質向上が期待されている。

藤田医科大学教育病院看護部と共同で、高齢者の失禁関連皮膚炎（Incontinence-associated dermatitis: IAD）関する研究を行っている。IAD の発症に関する細菌の可視化に成功した。具体的には、黄色ブドウ球菌が皮膚表面に定着していることを、培地を用いて証明し、IAD の予防・治療に新たな視点を提供している。

帝王切開後の肥厚性瘢痕予防に向けて、テープ材にかかる力の計測も実施している。人工皮膚と機械を用いて、テープの剥がれ方やひずみを分析し、より効果的なケア方法の開発を進めている。

藤田医科大学のオープンファシリティーセンターの設備を活用し、大学院生の研究支援を実施した。リンパ輸送のリアルタイム計測など、高度な機器を用い研究を展開することができた。

看護部との連携により、摂食嚥下、感染管理、NICU・GCU など多岐にわたる分野で論文作成を支援した（Yamasaki et al., 2022：梶川ら、2025）。国内外での学会発表も積極的に行い、複数の研究費を獲得、研究の持続性と発展性を確保している。台湾、スペイン、マレーシアなどの海外学会に参加し、国際的な研究者との交流を通じて自身の研究を深化させグローバルな視点を取り入れた研究活動を展開している。

本講演のテーマである「コンバージェンス」は、分野・職種・技術・組織の融合によって新しい価値を創出する力である。看護と工学、情報技術、企業との連携を通じて、社会実装を実現する場として「藤田医科大学社会実装看護創成研究センター」の役割が強調された。

文献

Yamasaki M, Kohta M, Miki T, Tamura S, Ishitani T, Ikoma T, Ishiyama Y, Kaigawa M, Sugama J, Mano K. Incidence and patient characteristics of aspiration pneumonia using a nursing screening model in an acute hospital. Journal of Nursing Science and Engineering. 2022; 9: 190-200.

梶川智弘，光田益士，西田梨恵，須釜淳子．新型コロナウイルス感染症（COVID−19）の5類移行後における看護職員の手荒れ有訴率と関連因子．環境感染誌．2025; 40: 46-52.

シンポジウム２：看護職の知的実践を拓く：臨床現場と研究の架橋による人材育成

司会　社会実装看護創成研究センター　教授　村山陵子

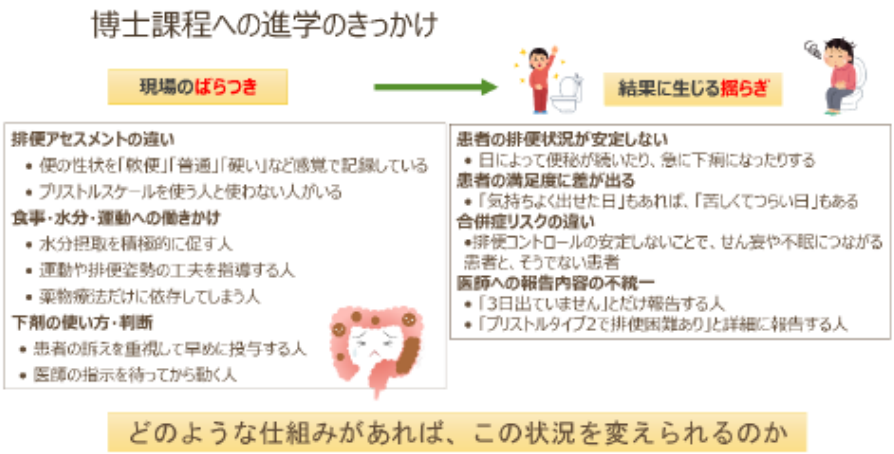
１．　誰のために研究するのか：現場から問いを立て続ける力

藤田医科大学病院 看護部 看護長
社会実装看護創成研究センター 特別研究員
佐野友香

本講演では、演者の藤田医科大学病院看護師としての歩みと博士後期課程での研究活動を通じて、臨床現場の課題を問いに変え、実装へとつなげる取り組みについて紹介された。特に「ケアのばらつき」への問題意識と、「可視化技術」の臨床応用が中心的なテーマとして語られた。

演者は 2000 年に藤田医科大学病院に入職し、6 年間勤務後退職し、2013 年に再入職した。現在は戦略担当看護師として勤務している。37 歳で修士号、43 歳で MBA（経営学修士）を取得し、2022 年に藤田医科大学大学院保健学研究科博士後期課程へ進学し、2025 年 3 月に 50 歳で学位を取得した。年齢を公表した理由として、「何歳でも学びは続けられる」というメッセージを伝えたかったためだと強調した。また博士後期課程修了は、周囲の支援によって成し得た成果であると感謝を述べた。

博士後期課程進学のきっかけは、現場で感じた排便ケアのばらつきであった。ブリストル便形状スケールの使用の有無、水分摂取や運動への働きかけの違いなど、アセスメントやケアにばらつきがあり、患者満足度にも影響していた。これを「仕組みで支える」必要性を感じ、研究への動機となった。博士後期課程では、以下の３つの研究に取り組んだ。



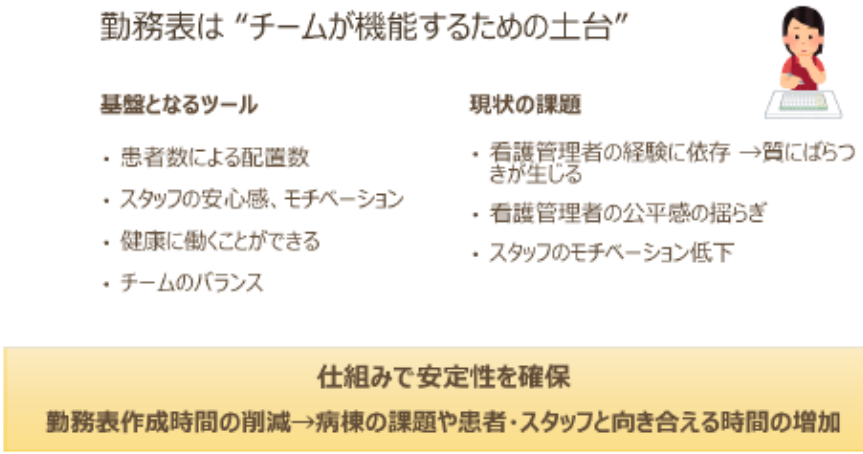
最初に、高度急性期医療を担う藤田医科大学病院における便秘有病率の調査を行った。病院全体では有病率は 12.2%であり、診療科別では精神科が 64.1%と最も高かった。「週に 3 回未満の排便回数」以外の症状を便秘の指標に用いると、36.8%が便秘と判断され、回数のみでは見落としがあることが判明した(Sano et al., 2024)。

次に、排便アセスメントにおける看護師のコンピテンシーを調査した。便秘の有病率が低い病棟では「便の色の観察」、「統一されたプロトコル」が関連していた。有病率が高い病棟では「アセスメントを高めたいという意欲」が関連していた。便秘有病率を下げるためには、統一した排便ケアのプロトコルと病棟全体の排便に関するアセスメント力を向上させたいという意欲の両立が重要であることが示された(Sano et al. 2025)。

最後に、訪問看護の排便ケアにおける携帯型エコー活用の促進・阻害要因について質的研究を行った。促進要因として「利用者の排便後の爽快感の表出」、「看護師間の画像共有」などが抽出された。阻害要因として「技術習得の困難さ」、「摘便から自然排便に移行する成功体験の不足」などが抽出された。初期導入時に阻害要因を減らし、促進要因を取り入れる仕組みが継続的な実装に繋がる。博士後期課程の研究は日本創傷・オストミー・失禁管理学会の研究助成金を受けて行い、現在論文投稿中である。

学位取得後は、戦略担当として「可視化」を意識した業務を推進してきた。携帯型エコーによる排便ケアはその一例である。問診や聴診では把握しづらい排便状況を客観的に評価し、不要な摘便や処置を減らし、スタッフ間の共通認識を支えるツールとして活用されている。「硬そう」「溜まっている気がする」といった感覚的評価から、「画像で見える」根拠ある評価へと変化し、ケアのばらつきが減少する。演者がこれまで感じていた研究と現場の距離が縮まるきっかけとなった。

博士後期課程修了者には、問題提起・分析・理論化の３つの能力が求められる。現場の問いを研究に変え、仕組みに反映する力、根拠ある看護技術を普及・検証し、次世代の人材を育てる力が臨床看護師にとっての博士号取得の意義であると述べた。今後の研究テーマとして、「看護管理者がもっと楽に勤務表を作成するにはどうすればよいか？」という問いを設定している。勤務表は患者の安全、スタッフの安心、チームの機能を支える基盤であるが、作成者の経験的な判断が多く、ばらつきが生じやすい。そのばらつきは、特にスタッフの不公平感や働きづらさにつながり、結果として現場全体のモチベーションにも影響する。看護管理者の勤務表作成にかかる時間を、AI を活用し削減することで、現場の状況や患者・スタッフと向き合える時間をさらに増やすことができると考える。AI を活用した勤務表作成の仕組みづくりを研究テーマとし、次年度の科研費申請を行った。



研究は患者・スタッフ・現場のための道しるべであり、問いの出発点は常に目の前の臨床にある。看護管理者はスタッフと共に問いを育て、根拠ある実践を支える研究を続けることが重要であり、その姿勢こそが、自分自身と看護部を支える力になると締めくくられた。

文献

Sano Y, Sugama J, Hiroe K, Murayama R, Kohta M, Ishihara T, Mano K. Prevalence of constipation and associated factors in university hospital inpatients. Fujita Med J 2024; 10(4): 98-105.

Sano Y, Sugama J, Koyanagi H, Murayama R, Ishihara T, Mano K. Nurse competencies in defecation assessment related to constipation prevalence in a university hospital. J. Jpn. WOCM. 2025; 29: 27-40.

2. 認定看護師の実践を証明する：研究という次の一歩へ

藤田医科大学病院 看護部 主任
藤田医科大学大学院 保健学研究科 博士後期課程２年
田村茂

本講演では、「認定看護師の実践を証明する研究と次の一歩」をテーマに、演者がこれまで歩んできたキャリア、摂食・嚥下障害看護認定看護師としての活動、そして研究を通じた実践の可視化と今後の展望について紹介された。

演者は 2002 年に藤田保健衛生大学を卒業後、耳鼻科病棟で看護師としてのキャリアを開始した。その後、脳神経外科、公衆衛生、回復期リハビリ、救急総合内科病棟など、24 年間にわたり「首から上の領域」を中心に看護を実践してきた。現在は保健師、摂食・嚥下障害看護認定看護師、NST 専門療法士の資格を有し、「食べる専門家」として活動している。

演者が認定看護師を目指した背景には、男性看護師としての将来のキャリアパスへの不安があったからである。当初はがん化学療法看護領域を検討していたが、第２教育病院の三鬼部長から「耳鼻科の知識を持つ摂食・嚥下障害看護認定看護師が必要」との助言を受け、摂食・嚥下領域への挑戦を決意した。眞野統括看護部長との面談を経て、１年間の準備期間を経て受験し、認定看護師資格を取得した。

摂食・嚥下障害看護認定看護師として活動する中で、学会での研究発表を行ってきたが、自分の中では医師の助力をもらわないと自身の活動を表現できないことに力不足を痛感していた。そのような中、藤田医科大学社会実装看護創成研究センターとの連携が始まった。須釜先生・光田先生の指導のもと、自分たちの実践がロジカルに組み立てられ英語論文として形になる経験を通して、自分でも認定看護師の実践を研究として表現できる人間になりたいと研究への意欲が高まった。高井看護副部長の後押しもあり、大学院進学を決意した。英語を基礎から学び直し、入学試験を経て進学を果たした。

摂食・嚥下障害看護認定看護師制度は 20 年が経過し、チーム医療や診療報酬加算の普及が進んでいる。院内の摂食機能療法の加算件数は増加傾向にあり、2025 年には 2016 年の約 3 倍に達する見込みとなった。しかし、摂食・嚥下障害看護認定看護師の配置は加算算定の必須条件ではなく、制度的評価は限定的である。一方、皮膚・排泄ケア分野における褥瘡ハイリスクケア加算や感染管理分野における感染防止対策加算では認定看護師の配置は加算要件に含まれている。摂食・嚥下障害看護領域は社会的ニーズが高いにもかかわらず制度的評価が低いと感じている。このため、実践の成果を可視化し、エビデンスとして示すことが重要である。

藤田医科大学は 1376 床という日本最大級の病床数を有し、症例数・患者背景の多様性・関連施設の広さなど、臨床研究に最適な環境が整っている。大学や社会実装看護創成研究センターとの連携も密であり、質の高い研究指導が受けられる点も大きな強みである。

修士課程では「角度表示機能付きベッドによる嚥下残留の低減効果」をテーマに研究を実施した。機能付きベッドの使用により咽頭残留率が低下し、安全な食事支援が可能になることを実証した。この研究は国際学会で発表され、論文も国際ジャーナルにアクセプトされてインターネット上で公開された (Tamura et al, 2025)。自身の研究成果が形になったことに大きな達成感を得た。

博士後期課程では、自立した研究力、学際的な視野、国内外へのエビデンス発信力の養成を目指している。臨床の実践を研究に昇華させ、制度や政策に反映させることが最終的な目標である。

摂食・嚥下障害看護認定看護師の社会的価値を明示するためには、研究と論文によるエビデンスの積み上げが不可欠である。修士課程で得た基礎力を土台に、博士後期課程では研究設計・推進力を高め、臨床の実践を制度に反映させる力を育てていきたい。今後も臨床の中で研究を続け、実践の価値を証明し、看護の未来に貢献していく意欲が示された。

まとめ

・修士課程で培った
「文献検索・批判的吟味・論文作成」の基礎力を土台に

・博士課程では
「自ら研究を設計・推進する力」と
「嚥下CNの社会的価値をエビデンスとして提示する力」を養い

・その先に
「臨床の実践を研究に昇華させ、制度・政策に反映させる」
ことを目指していきたいと思っています

文献

Tamura S, Miura Y, Kohta M, Ikoma T, Ishitani T, Mano K, Sugama J. Beds with angle indicators and head lift function contribute to appropriate angles during eating and a low prevalence of pharyngeal residue. Advanced Robotics. 2025; 39: 959-969.

3．大学院課程で育まれた探求心と俯瞰力が支える看護管理実践：臨床と研究をつなぐ人材の可能

藤田医科大学病院看護部　主任
藤田医科大学大学院 保健学研究科 博士後期課程１年
齋藤　祐也

本講演では、演者が大学院で得た学びを臨床にどう生かしているか、そして自身のライフワークとして取り組む研究課題について紹介された。臨床と研究の往還を通じて、看護師の働きがいと職場環境の改善に貢献する姿勢が示された。

演者は高度救命救急センターの救急救命室（emergency room: ER）に勤務し、フライトナースやドクターカーナースとして病院前救急から院内救急まで幅広く活動している。看護主任として部署管理にも携わり、看護管理実践にも取り組んでいる。2025 年度に看護学修士を取得し、同年博士後期課程に進学した。臨床と学びを両立しながら、看護学の探究を続けている。

看護師 6 年目、コロナ禍の収束後にキャリアアップを考えていた時期、部署内では中核的存在となり、後輩教育も任され、自己流ではあるが、部署内の看護が良くなるように取り組んでいた。しかし、力を入れて教育してきた後輩がネガティブな理由で退職した際に、とても悲しく喪失感に襲われた。また、「個人のスキルアップだけでは限界がある」と痛感し、より多くの看護師に影響を与える活動を志し、大学院進学を考えるようになった。その頃、社会実装看護創成研究センターとのニーズ・シーズマッチングにおいて小柳先生と出会い進学への後押しを受け、大学院を受験し入学した。

大学院進学のきっかけ

看護感と葛藤

教育した後輩がネガティブな理由で退職した際に、とても悲しく、喪失感に襲われた。

一人の看護師が頑張っても、目の前の患者さんしか救えない。

自分の活動が、もっと多くの看護師のためになる取り組みをしたい！

- 自己の教育力を向上させたい
- 目の前の問題だけではなく、学問的発展による全看護師へ
- 臨床の実践家としても活躍し続けたい

大学院では「看護とは何か」、「看護学とは何か」を深く考える機会が多く、日本看護科学学会の定義に基づき、看護学は理論と実践の相互作用によって発展する学問であると理解した。さらに、石川県立看護大学・学長の真田弘美先生の「東京大学に医学部と看護学部しかない意味」に関する話からも、看護師は専門職者であると同時に学問者である必要があるとの認識を深めた。

臨床で培った「迅速な判断力」、「チーム連携力」は、研究や教育にも活かせる力であると実感している。経済産業省が提唱する社会人基礎力としての一前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力一は、臨床と研究の両方に通じる力である。また、「研究と臨床の往還」すなわち、研究で得られた知見を臨床に還元し、臨床で生じた課題を研究へとつなげていくことが、看護学の発展支えると述べた。

演者の研究テーマは「中堅看護師のワークエンゲージメント向上」である。看護師の定着化が課題となる中、特に中堅層の離職は看護の質に直結する重大な問題である。ワークエンゲージメントはバーンアウトと対比される概念であり、離職率とも関連がある。演者氏はその中でも「上司からの承認行為」に注目している。承認行為は、部下の存在や成果を肯定的に評価し、それを伝える行為であり、自己効力感や職務満足感を高める要因と考えられる。

修士課程では、中堅看護師が受けている承認、望んでいる承認について調査を実施した。その結果、承認行為は「親密な交流」「支持的な相談・助言」「心地よい注目」「肯定的な業績評価」「承認行為のための環境調整」の５つに分類できることが判明した。

看護管理者が中堅看護師に行う承認行為

これを基に、看護管理者向けの教育プログラムを開発し、承認行為を実践できるようにするための教育コンテンツを作成した。

博士課程では、修士課程で開発した教育プログラムを実際に導入し、介入研究を通じて中堅看護師のワークエンゲージメントへの効果を検証する予定である。最終的には、看護師の定着化、離職防止、看護の質向上に貢献することを目指している。

本研究は、大学院指導教員、統括看護部長、看護部の皆様の支援によって進められており、深い感謝の意が述べられた。今後も臨床と研究を往還しながら、看護師が働きやすく、やりがいを持てる職場づくりに貢献していく意欲が示された。

文献

Saito Y, Koyanagi H, Mano K, Murayama R. An exploratory study of recognition behaviors practiced by mid-level nurse managers and perceived by mid-level staff nurses. FMJ. 2025; in press

シンポジウム３：看護部と創る臨床研究の新展開

司会　藤田医科大学病院　看護部長　髙井亜希
司会　社会実装看護創成研究センター　准教授　小柳礼恵

１．　社会実装を加速する看護研究：多職種連携で実現する看護のチカラ

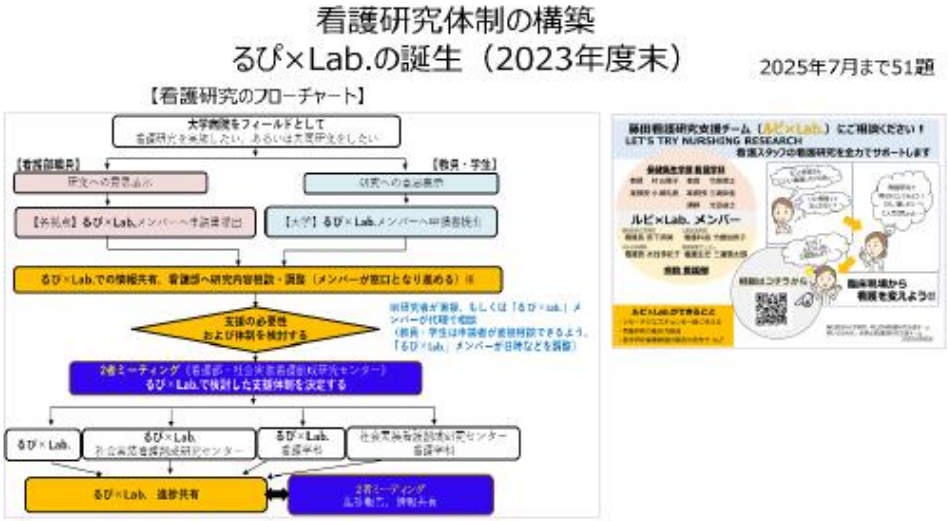
藤田医科大学病院　病院機能管理・JCI 対策室　看護長
宮下照美

本講演では、臨床現場における看護研究の加速と Implementation Science（実装科学）を活用した取り組みについて報告された。特に「るぴ×Lab.」の活動を中心に、臨床と研究の架け橋となる実践が紹介された。

Implementation Science とは、エビデンスのある介入を日常の保健医療活動に効果的・効率的に取り入れる方法を開発・検証する学問領域である。看護管理者にもこの視点が求められており、特に電子カルテやレセプトデータなどの「リアルワールドデータ」の活用が鍵となる。しかし、現状ではこれらのデータが十分に活用されていないことが課題として指摘された。

臨床看護師が研究との両立を困難に感じる背景には、時間的制約、人材不足、体制の未整備などがある。QI（Quality Improvement）のギャップ図を用いて、エビデンスと実践の乖離が説明され、これを埋めるためには Implementation Science の視点を持ち、研究と臨床をつなぐ取り組みが必要であると述べられた。

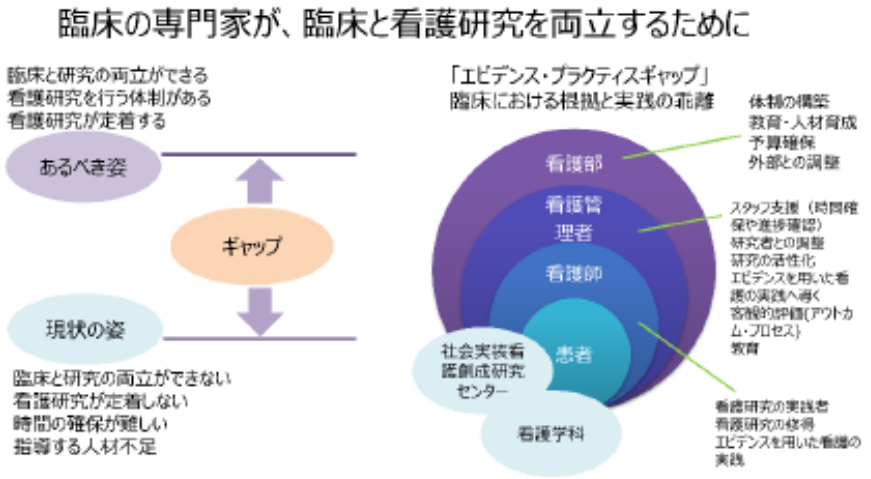
高井らと社会実装看護創成研究センターによる共同研究において、藤田医科大学教育病院の看護管理者を対象に研究ニーズ調査を実施した。調査結果では、約 87%が研究に困難を感じ、67%が人材確保の難しさ、70%が知識不足を課題として挙げた。この結果を受け、藤田医科大学の 4 教育病院、社会実装看護創成研究センター、看護学科が連携し、2023 年度末に「るぴ×Lab.」を設立した。現在までに 51 件の研究が進行しており、看護研究の活性化に大きく貢献している。



2024 年 7 月、藤田医科大学病院では褥瘡発生件数が増加し、看護部として危機感を持って対策を開始した。データ収集のシステム構築、記録整備、スタッフ教育、物品管理、チーム強化などを実施し、褥瘡発生率は右肩下がりに改善した。各病棟に褥瘡チームを設置して、チーム機能の成果がデータからも確認された。

社会実装看護創成研究センター小柳先生と緩和ケア病棟との共同研究では、「体圧分布の可視化が看護師の褥瘡予防に関する知識、行動に与える影響」をテーマに、調査を実施した。体圧分布モニター付きマットレスを導入し、導入前後で病棟看護師を対象に知識テストを実施した。研究結果では、知識の合計点に有意差は認められなかったが、特に「原因と発生機序」の項目において、導入後の点数が増加する看護師が増え知識の上昇が認められた。病棟管理者からは、予防的ケアへの意識の向上、終末期患者へのケアのコツの習得、家族への指導の実施など、実践面での変化が報告された。新人看護師もスペシャリストから直接学ぶ機会を得て、自信を持ってケアに取り組む姿勢が育まれている。

臨床と看護研究を両立するためには、エビデンス・プラクティスギャップをどう埋めていくかということであるが、看護管理者がエビデンスを用いた看護実践を導く役割を担うことが重要である。実践の客観的評価、アウトカムやプロセス評価をデータとして示し、社会実装看護創成研究センターや看護学科と連携することで、Implementation Science を活用した定着が可能となる。今回のシンポジウムを契機に、看護の原点に立ち返り、専門職としての誇りを持って一歩一歩前進していく姿勢が示された。



2.　臨床の“気づき”から始まる看護研究と実践の質向上

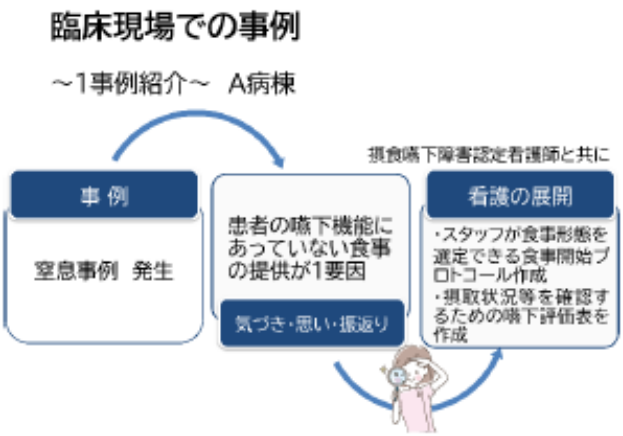
藤田医科大学ばんたね病院看護部　看護長
水谷多紀子

講演では、日々の看護実践の中で得られた気づきが、どのように研究へと発展し、臨床現場に還元されていったかについて紹介された。看護師の感性と実践力が、組織的なケア改善と学術的成果につながるプロセスが丁寧に語られた。

日常の看護実践において、患者との関わりの中で生じる「違和感」や「違い」は、看護の質向上への

重要な手がかりとなる。こうした気づきには、「より良い看護を提供したい」「患者の回復を支えたい」という思いが込められており、振り返りを通じて研究の出発点となる。

Ａ病棟で発生した患者の窒息事例を契機に、チーム全体で振り返りを実施した。検討の結果、嚥下機能に合わない食事提供が原因の可能性が浮上した。これを受けて、摂食・嚥下障害看護認定看護師と連携し、嚥下機能評価体制を整備した。食事開始プロトコルと口腔ケアプロトコルを作成し、入院時からリスクを把握できる仕組みを導入した。スタッフ全員が共通の視点で食事介助に関われる体制が構築された。



この取り組みは、社会実装看護創成研究センターとの連携により、実践報告として体系化し論文投稿に至った（野村ら，2025）。問題意識の明確化から文献検索、テーマ選定、データ収集、結果分析、実践への応用まで、専門的支援を受けながら進行した。作成したプロトコルはＡ病棟のみならず、全病棟へと展開され、入院時の誤嚥リスク評価が全体で実施可能となり、安全なケアの提供に寄与している。

さらに、入退支援室において嚥下評価や口腔状態の確認を行う体制を整備した。必要に応じて歯科受診につなげることで、入院前からリスク把握と早期介入が可能となった。この取り組みも学会誌で採択される予定であり、実践と研究の融合が進んでいる。

今後の取り組みは、以下の４つの柱を中心に展開される予定である。１点目は、気づきから研究へつなげる文化の醸成である。日常の違和感を見逃さず、研究の種として活用する環境を創る。２ 点目は、看護研究と臨床実践の好循環の構築である。現場で生まれた研究を実践に還元し、成果をフィードバックすることでケアの質を向上させる。３点目は、研究支援体制の拡充とネットワーク形成である。社会実装看護創成研究センターとの連携を深め、多職種・他施設との共同研究を推進する。４点目は、学会発表・論文投稿による発信と人材育成である。現場の知見を学術的に発信し、若手看護師にも研究・発表の機会を提供する。

今後の展望

1.「気づき」「思い」を研究へとつなげる文化の醸成

1)日常の看護実践において、違和感や違いを見逃さず、研究の種として活用

2)看護師一人ひとりが研究的視点がもてる環境づくり

2. 看護研究と臨床実践の好循環をつくる

1)現場発の研究を実践に還元

2)成果をフィードバックし、患者ケアの質を継続的に改善

3. 研究支援体制の拡充とネットワーク形成

1)社会実装看護創成研究センターとの連携を深化

2)多職種・他施設との共同研究を推進し、成果を広く共有

4. 学会発表・論文投稿を通じた発信

1)現場の知見を学術的に発表することで、看護の発展に寄与する

2)若手看護師にも研究・発表の機会を広げ、次世代育成へ

今回の取り組みを通じて、日々の看護実践の中で感じる違和感や疑問が、看護の質を高める重要な一歩となることが改めて確認された。今後も、患者にとってより良い看護を提供するため、臨床と研究の両面から継続的な取り組みを進めていく姿勢が示された。

文献

野村 有香, 三鬼 達人, 本多 吾也子, 林 雅子, 中島 由貴, 松浦 広昂, 須釜 淳子. 窒息事例から食事開始プロトコールを導入して：整形外科病棟での取り組み. 日摂食嚥下リハ会誌. 2025; 29: 22-26.

3. エビデンスに基づく看護の実践：クロスオーバー試験によるワイプシートの効果の検証

藤田医科大学七栗記念病院 看護部 看護長
西川圭二

本講演では、臨床現場での疑問を出発点とし、社会実装看護創成研究センターとの連携を通じて、研究の実践と成果を得たプロセスが紹介された。

第三教育病院ではこれまで看護研究に取り組んできたが、事例報告や事例発表が中心であり、臨床の疑問を可視化し、研究へと発展させることが困難であった。2021 年、社会実装看護創成研究センターとのマッチング会に参加し、IAD（失禁関連皮膚炎）や尿路感染症に対する陰部清拭用ワイドシート導入の効果について相談した。アウトカム評価や調査費用の課題があったが、センターの支援により研究として形にすることができた。

2022 年度より、陰部清拭用シート「ベリケア」の使用前後で細菌数を調べる介入研究を開始した。社会実装看護創成研究センターの支援により、Teams での継続的なミーティング、説明方法の検討、研究手順の整備などが行われた。三重県までの訪問指導も実施され、検体採取方法の統一や物品管理な

ど、実践的な支援が提供された。さらに、日本創傷・オストミー・失禁管理学会の研究助成金申請のアドバイスを受け、調査費用の確保にも成功した。

社会実装看護創成研究センターからの支援

・陰部清拭用ワイプシート
「ピュレル®シュアステップ™ペリケア」
(以下ペリケア)の使用前後の細菌数を介入研究

Teamsでのミーティング	当院での直接指導	研究助成金申請
研究内容を検討 患者家族への説明方法の検討	物品説明 検体採取の統一 →検体採取は1名で実施する	日本創傷・オストミー・失禁管理学会学会の研究助成金を受け、調査費用を捻出

研究は単施設ランダム化比較クロスオーバー試験として実施した。対象は回復期リハビリテーション病棟に入院する 20 歳以上の排泄におむつを使用する患者とした。除外基準を明確に設定し、平均在院日数 60 日という施設特性を活かした設計となった。サンプル数は 26 名（各群 13 名）で、ペリケアと従来の陰部洗浄をクロスオーバーで実施した。菌数の変化を比較した結果、ペリケア使用群では菌数が有意に減少し、導入に向けた根拠を得ることができた。

本研究により、七栗記念病院として新たな研究体制のスタートを切ることができた。精度の高い研究設計、助成金の獲得、エビデンスに基づいた看護実践の推進が可能となった。日常の看護実践を数値化し、質の向上につながる方法を導き出すことができた。職員の研究意識も高まり、次の研究課題の提案が出るなど、組織全体のモチベーション向上にも寄与している。2024 年度には看護研究の発表件数が増加し、論文投稿も 3 件達成した。英語論文の投稿も進行中であり、2025 年度にはすでに 9 件の発表が採択されている。

今後は、今回の研究成果を臨床現場で活用し、新たな臨床疑問を可視化して看護研究へとつなげていく。エビデンスに基づいた看護の実践をさらに推進し、スタッフがシンポジウムや学会に参加することで研究に触れる機会を増やし、人材育成にもつなげていく方針が示された。

まとめ

① 新たな挑戦へのスタート
・より精度が高いと言われているクロスオーバー試験の介入研究ができた
・研究助成金の申請により、調査費用を捻出できた

② 看護の質の向上
・疑問を可視化できたことで、エビデンスに基づいた看護につなげることができた
・日頃の看護実践の結果を数値化することができ、さらに質を向上していく方法が導き出せた

③ 職員の研究心の育み
・今回の研究を行うことで、スタッフから次の研究課題が提案され、研究に対する意識が変わり、モチベーションにつながっている

文献

Nishiyama T, Kohta M, Nishikawa K, Takekoshi K, Shioji Y, Sugama J, Matsushima A. A pilot randomized cross-over trial assessing the effectiveness of disposable wet wipes for the reduction of bacterial colonization on genital skin in hospitalized patients. J Jpn WOCM. 2025; in press.

4．看護研究取り組み支援の連携

藤田医科大岡崎医療センター　看護部　看護科長
福本由美子

本講演では、施設単位で行う看護研究の課題と限界を踏まえ、社会実装看護創成研究センター、「るび×Lab.」による支援により、看護研究の質向上と継続的な実践への還元を目指す取り組みが紹介された。

看護研究は、日々の実践の中で生まれる疑問を科学的に検証し、より良いケアを提供するための重要な活動である。患者の安全や満足度の向上、看護師の専門性の強化にもつながる。しかし、施設単位で研究を進めるには限界がある。看護師の教育背景は多様であり、研究経験の有無によって準備状態（レディネス）に差がある。特に専門学校や短大卒業者は研究経験が乏しい場合が多く、画一的な指導では対応が難しいという課題がある。

施設単位での看護研究の現状と課題

1）教育背景の多様性
研究に取り組む前のレディネスの差

2）業務との両立の難しさ
研究活動が後回しになりがち

3）研究指導者の不足
研究指導ができる人材不足

4）成果の限局性
学術的な論文発表まで発展しない

岡崎医療センターでは、大学院修了者を中心とした看護研究支援チームを設置し、症例報告や実践報告レベルでの学会発表を支援している。現場の看護師にとっては心強い存在であるが、支援者自身も日常業務を抱えており、時間的・専門的な限界がある。特に研究デザインや統計分析など、専門的知識が求められる場面では外部との連携が不可欠である。

研究を進めるためには、文献検索、統計ソフトの利用、データベース環境などが必要であるが、第一教育病院以外の拠点では図書室すらないため場合もあり、資源が不足している。看護師が「研究をしたい」と思っても、継続が困難であるという声が多く聞かれる。

このような状況の中で、「るぴ×Lab.」による支援は非常に有益である。特に以下の点で効果が高いと言える。１つ目として、臨床の疑問を学術的に整理・構造化することで、研究として成立させることが可能となった。２つ目として、計画書作成のプロセスを通じて、看護師自身が研究的視点を持ち、次の課題を見出す力が育まれた。３つ目として、倫理的配慮を踏まえた調整や、適切な収集方法の提示により、安心して研究に取り組むことができた。４つ目として、論文構成、表現方法、投稿規定への対応など、専門的な支援により、施設内で完結していた研究が学術的に発信可能となった。これらの支援により、理論と実践の統合が促進され、科学的かつ実用的な看護の発展につながっている。

施設単位で行う看護研究には限界があるが、「るぴ×Lab.」の支援により、研究の質は確実に向上している。研究は研究者だけのものではなく、実践と学術が協働することで意味を持つ。最後に、看護の未来を共に築くことの重要性が強調された。臨床と大学が連携し、共同することで、より良い看護の提供と看護職の専門性向上が実現できる。現場と学術が手を取り合い、看護の未来を共に作り上げていく姿勢が示された。

講評

藤田医科大学保健衛生学部　学部長・教授
長谷川みどり

本講評では、各講演を通じて明らかとなった看護研究の広がりと、臨床現場への社会実装の成果について総括された。

センター長講演：冒頭講演では、センター設立に至るまでの経緯と、実装科学の 4 ステップを看護部・看護学科に展開してきた取り組みが紹介された。現場の聞き取りを起点とした着実な研究推進、論文数の増加、臨床の多忙さの中でも研究に取り組む姿勢が印象的であった。

シンポジウム１－１：エコーを活用したアルゴリズム開発、阻害・促進要因の分析、チャンピオンナースとの協働など、現場に根ざした実装研究の好例。国内外への発信力も高く、藤田医科大学の研究力を示す内容であった。

シンポジウム１－２：排便サポートチームの構築、エコーによるアセスメント、認知症患者への対応など、臨床課題に対する実践的な取り組みが評価された。透析患者など他領域への応用も期待される。

シンポジウム１－３：「いつまでも食事を楽しめる社会」を目指した取り組みは、栄養介入だけでなく、患者の尊厳に直結する重要なテーマ。誤嚥リスクの可視化と食事支援の可能性が広がる研究である。

シンポジウム１－４： アプリやシート開発、国際学会への発信など、多職種連携による研究の広がりがセンターの発展に寄与している。

シンポジウム２－１：ケアのばらつき・揺らぎの解消を目指し、「誰のための研究か」を問い続ける姿勢が印象的。研究が自己成長と看護部の支えにつながるというメッセージは、多くの看護師に勇気を与えるものであった。

シンポジウム２－２：英語論文のアクセプトに至るまでの過程が共有され、研究成果が社会に届く喜びが伝わる内容であった。

シンポジウム２－３：後輩の退職という経験から生まれた研究が、中堅看護師の離職防止へとつながる。職業人としての視点からの研究は、看護の可能性を広げるものである。

シンポジウム３－１： ロボティックマットレスの導入による褥瘡発生率の改善、看護師の声かけによる実践の変化など、研究と実践の融合が見事に示された。

シンポジウム３－２：日常の気づきから研究へとつなげる姿勢は、医師の視点とも共通し、臨床と研究の距離を縮める好例であった。

シンポジウム３－３：高精度な研究デザインの実施、助成金獲得、臨床への成果還元の流れが確立されており、施設研究のモデルケースとなる。

シンポジウム３－４：研究環境が整っていない中でも、「るぴ×Lab.」の支援により論文発表まで進められたことは、臨床看護師にとって大きな力となっている。

最後に総括と今後への期待が述べられた。本シンポジウムを通じて、臨床現場の課題を研究として深め、その成果を実装し、教育へと還元する好循環が確立されていることが確認された。これは藤田医科大学および社会実装看護創成研究センターが築いてきた成果であり、今後の５年間においてもこの循環がさらに広がることが期待される。改めて、センター設立５周年を祝し、今後のさらなる発展を祈念し、講評が締めくくられた。

おわりに

社会実装看護創成研究センター5 周年記念シンポジウムを行い、あらためて藤田医科大学の看護の根底にある「より良い看護を実践する」という気概を実感した。おそらく、社会実装看護創成研究センターの設立が引き金となり、臨床看護研究に良いことを積極的に吸収し、必要なことを即座に実行に移し、結果的に４教育病院の多部署での看護研究への期待に火がつき、広がりをみせたと考える。

2024 年に文部科学省から全国 11 校目の「橋渡し研究支援機関」に認定されたことを契機に、藤田医科大学では研究力向上に向けた潮流が高まってきている。看護においてもこの流れにしっかりと乗っていく必要がある。センターの次の５年間の目標は、「るぴ×Lab.」で支援する研究の質向上に向けた取り組みの強化である。具体的には以下の３点である。１つ目は、研究成果をエビデンスとするための論文化のプロセスを根付かせる仕組みを構築することである。２つ目は、柱となる研究テーマの核をもつことである。このためには、大学、臨床の共同研究チームの構築が必要である。３つ目は、博士後期課程を修了した大学院生の臨床看護研究実践のステージを構築することである。このステージにおいて大学院生は社会実装看護創成研究センターの特別研究員としてキャリアを積み、臨床看護研究の主導や科研費等の研究費を獲得できる体制を整えることである。

設立から今日まで、社会実装看護創成研究センターの活動にご理解とご指導を賜りました石川県立看護大学学長・真田弘美先生、藤田医科大学前学長・才藤栄一先生、副学長・金田嘉清先生、保健衛生学部長・長谷川みどり先生、保健衛生学部前看護学科長・三吉友美子先生、看護学科長・世古留美先生、看護学科教育各位に感謝申し上げます。また、５年間変わらぬ熱意と期待を寄せ続けていただきました藤田医科大学統括看護部長・眞野恵子様、藤田医科大学病院看護部長・高井亜希様、ばんたね病院前看護部長・相原晶子様、看護部長・三鬼達人様、七栗記念病院看護部長・松嶋文子様、岡崎医療センター前看護部長・小島菜保子様、看護部長・小野布佐子様、看護職員各位に心から御礼を申し上げます。最後に、５周年記念シンポジウムを豊かな経験とチームワークで運営いただきました大学院生の皆様に深謝申し上げます。

Appendix 1：フライヤー

シンポジウム 01
ケアの質を革新する看護技術の社会実装
演者：村山 陵子・小柳 礼恵・三浦 由佳・光田 益士

シンポジウム 02
看護職の知的実践を拓く：臨床現場と研究の架橋による人材育成
演者：佐野 友香・田村 茂・齋藤 祐也

シンポジウム 03
看護部と創る臨床研究の新展開
演者：宮下 照美・水谷 多紀子・西川 圭二・福本 由美子

藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター設立5周年記念シンポジウム

テーマ「社会実装を志向した看護学研究の展開：技術革新・人材育成・臨床連携の5年間の実績と展望」

プログラム ｜ 2025.9.6 (Sat) 13:00〜16:15

13:00-13:05	開会の辞	藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター センター長/教授	須釜 淳子
13:05-13:10	祝辞	藤田医科大学 病院長/本部 副理事長 藤田医科大学東京 災害医療研究センター 事業部長	髙野 直子
13:10-13:25	社会実装看護創成研究センター―設立から5年間の歩み	藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター センター長/教授	須釜 淳子
13:25-14:25	シンポジウム 01 **ケアの質を革新する看護技術の社会実装**		
	司会 藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター センター長/教授 須釜 淳子		
	■ 第6のフィジカルアセスメントツールとしての エコー可視化技術の開発・普及：末梢静脈カテーテル留置技術	藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 教授	村山 陵子
	■ 排泄ケアのイノベーション： 多職種連携とテクノロジーで実現する尊厳ある排泄ケアの未来	藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 准教授	小林 礼恵
	■ 摂食嚥下の可視化がもたらす新たな食事支援	藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 准教授	三浦 由佳
	■ コンバージェンスサイエンスで挑む創傷・スキンケアイノベーション	藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 講師	光田 稔士
14:25-14:40	休憩		
14:40-15:25	シンポジウム 02 **看護職の知的実践を拓く：臨床現場と研究の架橋による人材育成**		
	司会 藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 教授 村山 陵子		
	■ 誰のために研究するのか：現場から問いを立て続ける力	藤田医科大学病院 看護部 部長補佐 藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 研究員	佐野 友香
	■ 認定看護師の実践を"証明"する：研究という次の一歩へ	藤田医科大学病院 看護部 主任 藤田医科大学大学院 保健学研究科 博士後期課程2年	田村 茂
	■ 大学院教育で育まれた探究心と倫理力が支える看護管理実践： 臨床と研究をつなぐ人材の可能性	藤田医科大学病院 看護部 高度専門技術センター 主任 藤田医科大学大学院 保健学研究科 博士後期課程1年	東藤 祐也
15:25-16:05	シンポジウム 03 **看護部と創る臨床研究の新展開**		
	司会 藤田医科大学病院 看護部 看護局長 ｜ 藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 准教授 小林 礼恵		
	■ 社会実装を加速する看護研究：多職種連携で実現する看護のチカラ	藤田医科大学病院 病院看護管理・ICT推進室 看護長	宮下 朋美
	■ 臨床の"気づき"から始まる看護研究と実践の質向上	藤田医科大学ばんたね病院 看護部 看護長	水谷 多紀子
	■ エビデンスに基づく看護の実践： クロスオーバー試験によるフィブシートの効果の検証	藤田医科大学七栗記念病院 看護部 看護長	西川 幸二
	■ 看護研究取り組み支援の連携	藤田医科大学附属総合センター 看護部 看護部長	福本 田美子
16:05-16:10	講評	藤田医科大学 保健衛生学部 学部長/看護学科 教授	長谷川 みどり
16:10-16:15	閉会の辞	藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター 教授	村山 陵子

藤田医科大学

Appendix 2：運営組織

シンポジウム主催

保健衛生学部社会実装看護創成研究センター

センター長・教授　須釜淳子

教授　村山陵子

運営委員：光田益士（委員長）、小柳礼恵（記念品担当）、三浦由佳（懇親会担当）

実行委員：

受付：影浦直子、小笠原ゆかり、河西将志、又吉真由美

会場誘導：前田初美、河裾永恵、北野ゆりか、相原晶子

PC：富田元、石亀敬子

写真撮影：山本駿、沼田悠希

計時：遠藤真穂、酒井沙羅

記録：齋藤祐也、桂川清多、小林南菜子、内藤千尋、伊藤千佳、田村茂

広報・ポスター作製：松田奈々

Appendix 3：記念品

ボールペン

ペーパーウエイト

Appendix 4：会場内写真

統括看護部長・眞野恵子様からのご祝辞

冒頭講演・センター長　須釜淳子

シンポジウム１の司会＆演者

シンポジウム２の司会＆演者

シンポジウム３の司会＆演者

長谷川保健衛生学部長、世古看護学科長を囲んで

社会実装看護創成研究センター 2025 年報
発行年月日：2025 年 12 月 31 日
発行責任者：〒470-1192
愛知県豊明市沓掛町田楽ケ窪 1 番地 98
藤田医科大学研究推進本部 イノベーション推進部門
社会実装看護創成研究センター
センター長　須釜淳子